ゼロのココロ

すずらん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ゼロのココロ

【Ｎコード】
Ｎ１９７５Ｔ

【作者名】
すずらん

【あらすじ】
幼い頃に家族を亡くし親戚に引き取られた澪梓。
しかしその生活は……。
親戚に引き取られて８年、幼馴染の有紀の計らいで
全国トップレベルの金持ち学校に入学することに。
王道学園物の
綺麗系総受けです。

シリアル入ります

登場人物紹介（前書き）

初めまして、すずらんと申します。
初めての作品です…
気に入ってもらえると幸いです。

登場人物紹介

人物紹介

＊主人公
愛川（あいかわ）　澪梓（れいし）
・欧咲学園高等学部（おうさきがくえんこうとうがくぶ）第二学年
・２－Ｓ
・緑の瞳に色艶のある黒い髪
・身長１６７ｃｍ体重４６ｋｇという小柄な体系
・中性的な顔立ちで綺麗系
・有紀の計らいで欧咲学園に入学することに。
・入学早々親衛隊が出来た
・８歳の頃に両親を無くし、少々人間不信に。
・有紀と達紀にしかココロを開いてなかったが、徐々に他人にも…？
・ＩＱ１８０の天才児

＊主人公の友人
山中（やまなか）　有紀（ゆき）
・欧咲学園高等部第二学年　生徒会書記
・２－Ｓ
・黒目にふわふわした茶髪
・欧咲学園の理事長を叔父、担任を兄に持つ。
・澪梓の幼い頃からの友人で澪梓を欧咲学園に誘った。
・さわやか系のイケメン
・親衛隊持ち
・澪梓が好き

＊主人公の担任
山中（やまなか）　達紀（たつき）
・澪梓（２－Ｓ）の担任
・２６歳の超絶美形、
・有紀の兄で澪梓の事は昔から弟のように可愛がっている。

＊欧咲学園生徒会会長
鳴海（なるみ）　泰雅（たいが）
・欧咲学園高等学部第三学年
・３－Ｓ
・校門で出会った澪梓に一目惚れした。
・ワイルド系のイケメン
・親衛隊持ち

＊欧咲学園生徒会副会長
三代（みしろ）　理玖（りく）
・欧咲学園高等学部第三学年
・３－Ｓ
・此方もまた澪梓に一目ぼれした。
・腹黒インテリ眼鏡
・親衛隊持ち

＊澪梓の友人達
小国（おぐに）　莉兎（りと）
・拓也と付き合っていて、可愛い系

・親衛隊持ち

斑鳩（いかるが）　拓也（たくや）

・莉兎と付き合っていてイケメン

・親衛隊持ち

神崎（かんざき）　奏汰（そうた）

・澪梓と有紀の癒し。関西弁

・親衛隊持ちの残念なイケメン

＊欧咲学園理事長

山中（やまなか）　滝（たき）

・３６歳には見えない童顔

・芯の通った男前な性格

・学園の生徒のことをとても大切に思っている

＊欧咲学園保健課担当

村田（むらた）　想真（そうま）

・薄い茶髪に眼鏡をかけている美形。

・優しく、時に厳しくという出来た人。

・澪梓に懐かれる。

＊山中家の執事

舞中　ミネ（まいなか　みね）

・山中家専属執事。中でも有紀の世話を任されている。
・有紀、達紀、滝紀のいう事は絶対。
・誰であろうと命令の邪魔をする奴はどんな手を使っても排除する。

＊澪梓の家族

無くなった母→愛川　アリア
・フランス人。不慮の事故で亡くなった

無くなった父→愛川（あいかわ）　優流（まさる）
・日本人。不慮の事故アリアと共に亡くなった

愛川（あいかわ）　弘（ひろ）
愛川（あいかわ）　遥（よう）
・澪梓の親戚。澪梓を引き取ったが…

1

＊1　過去の記憶

「澪梓、走っちゃ危ないわよ」
「大丈夫だよー、お母さん」
「こら澪梓、お母さんの言う事を聞きなさい。」
「はーい、お父さん」
「あらあら、前を向いて歩きなさい。ーーー澪梓!!危ない!!」
「え？」

ーーープップー!!!

「「澪梓!!」」

ガンッッ

『おい!!人が跳ねられたぞ!!』
『誰か、救急車を呼べ!!』
『こりゃひどい……』
『子供が2人の下に居るぞ!』

その日、俺の唯一の肉親の
母と父が亡くなった。
俺が道路に飛び出して、俺を庇う為に両親が飛び出しトラックに引

かれたんだ。

そう、俺が飛び出したのに。俺だけが生き残って母と父が死んだんだ。
俺が死ねばよかったのに。

その日から俺は人と関わるのが怖くなった。
もしかしたら、又俺が殺してしまうかも…
俺に近寄らないで、、人を傷つけるのは嫌なんだ――！！

――――――――――――――――――――――――――――

「ハァッハッ、…ハァ、、」

夢…か。
……嫌な夢を見た。
今日から新しい学校に行くのに、目覚めが悪い。

俺は両親を亡くしてから親戚に引き取られた。
その時の生活は……また後々話そう。

1年ほど前から、1人暮らしを始めたんだ。
古くて小さいアパートだけど、とても充実した日々だった。

そして一週間ほど前に幼馴染の有紀に誘われたんだ。

『お前さ、俺の叔父さんがやってる欧咲学園って所来ない？』
『…え？　い、かない。』
『なんでだよー、俺と毎日一緒に居れんだぜ？！』
『それは、うれしいけど…。でも、行かない』
『澪梓は俺と一緒に居たくないんだ……？　すげー悲しい…』
『え、いや！ちがう！　…行く。行くから…。俺有紀の事す、きだし…』

『やった！！馬路うれしい！さすが澪梓だな！　…俺も澪梓大好きだぜ』
『……それで、入学テストはどこで受けるの？』
『あー、ちょっとまってね。　ミネ、テスト用紙を用意できるか？』
『可能で御座います有紀様。少々お待ちくださいませ…』
『ああ。　澪梓～ちょっと待ってねー、すぐ持ってくるから！』
『え、此処でやるの？』
『うん！　あ、ほら、来た。さあ、やったやった！！』
『あ、うん…』

1時間後ーー

『…終わった。』
『馬路かよ。おまえ、コレ平均3時間かかる奴なんだけど。』

『へ、そうなんだ？』
『おま、…まあいいか。　んじゃ、ミネ採点宜しく。』
『かしこまりました。』

３０分後ーー

『有紀様、採点終了しました。』
『おー、なん点だった？』
『４９８点で御座います。』
『は、馬路？！１問間違い？！』
『左様で御座います。』

『すっげ、俺、澪梓の頭のよさ舐めてた…』
『でも、１問間違えちゃったな…。残念。』

『なに言ってるの！此処の外部入学のテスト２００点取れればいいほうなのに…』
『そうなんだ、んじゃあ、良かった。』

という事があり、かの有名な欧咲学園高等学部への入学が決まったのである。

その入学式が今日。
入学式って言っても、俺しか入学した人居ないから
学園の人から言うと始業式なんだけどね。

ああ、折角有紀が気を使って学費免除とか色々してくれてはいれる学校なのに、朝から気分が悪い。
昨日安定剤を飲まなかったからか…。

俺、大丈夫かな…

1過去の記憶　終

1（後書き）

グダグダ文でスイマセン；；

2－1

＊2　欧咲学園

「で、かい、なぁ…」

俺は今、かの有名な欧咲学園の門の前に1人で立っている。
有紀が、一緒に着いて行くっていってたけど、今日は平日で有紀は学校もあるから
1人で大丈夫って言って断った。
ちょっと不満そうな顔してたけど、困ったように笑えば諦めてくれた。

有紀は、俺の両親が死んでから唯一安心出来る2人のうちの1人だ。
後1人は有紀のお兄ちゃんで達樹。俺は「たつにい」って呼んでる。
2人は、4歳のとき俺の家の隣に引っ越してきたんだ。
俺もあの頃は極普通の子供だったから、
2人とはすぐに仲良くなった。

明るくて優しくてかっこいいたつにいと
泣き虫で甘えん坊で可愛い有紀。
有紀は今だからカッコいいけど、小さいときは
本当に可愛かったんだ。

昔は良く3人で近くの公園に行って遊んだな…

それも、両親が死ぬまでだけど…。

両親が死んでから、俺は人と関わるのが怖くなった。
最初は、有紀とたつにいも怖かったんだ。
でも、2人は何回も話しかけてくれて、だんだん大丈夫になってきたんだ。
今では、俺が唯一甘えれる存在。

本当は、学園に行くのも嫌だった。
だって、寮で生活するって事は自然と他の人と関わるという事だから。
今だってうまく人と関われる自信は無いけど、
有紀が言ったから、俺はここに来た。

きっと、有紀が居なければ、俺は壊れていたと思うから――。

なんて考えてるうちにもう時間だ。

「はぁ…。い、くか…」

―？side―

今日も退屈な毎日。
ちびっこい奴らにキャキャー言われて纏わりつかれる。
いつもと、変わらない。
そう思いながらもう少しで始業式の準備が始まるからと
理玖と一緒に体育館を目指し歩いていた。

門の前を横切るとき、門の前に突っ立ってる奴を見つけた。
こんな奴見たこと無い。
小柄で、どこか切なげな表情の黒髪の…男？
女にも見えるが、服装的に男なんだろう。

とても綺麗な顔立ちだ。
そう思って足を止めると、理玖は不思議そうな顔をしたが、
俺の視線の先を見つけると、同じように歩くのを止めた。

何をするでもなく、ただボーッと門を見つめてるソイツを
俺達もボーッと見つめていた。

「はぁ…。い、くか…」

ソイツがはかなげな顔で静かにそういった。
その声は顔に似合い、少し高めの甘みを含んだ、それでいて凛とした声だった。

その瞬間、俺は一瞬で落ちた。

俺は自分で言うのもなんだけど、顔は整っていて、スタイルもいい方だと思う。
今まで、それなりに女遊びもしていた。
この学園は、ゲイとバイが当たり前だが、俺は違う。
列記としたのんけだ。
そう思っていたが、そんなことが嘘のように、俺は一目ぼれしたんだ。
喋ったことも無い、ただ門の前に立ってるのを見かけた奴に、だ。

自分の事ながら唖然としていると、ソイツが門のチャイムを鳴らした。
すると門が開き、ソイツが入ってきた。

あんなところにチャイムがあったとは…。

…待てよ。この学園に関係者以外が入れるわけが無い。
なのに、なぜコイツは入れてるんだ？

「…そういえば、転校生が来るって噂になってたよね。」

理玖がニヤッとしながらそういった。
ああ、コイツが例の転校生か。

今までとは違って、これからの生活は楽しくなりそうだ…

.

2―2

俺は欧咲学園に足を踏み入れた。

中に入ってみると、やはり、とてつもなく大きい建物だった。

パンフレットには、東京ドーム8個ほどの大きさって書いてたしなー。

そんなことを考えながら頭の中に入ってる地図を思い出しながら進んでいった。

小さな森のような場所を抜けると、そこはお城でした…

「城…」

ホーエンツォレルン城と言うドイツの城を知っているだろうか？

今目の前にあるのはまさにホーエンツォレルン城だ。

「そっ、くり……。城が3つある…」

そう、ホーエンツォレルン城にそっくりの城が3つもあるのだ…。

「伊達に金持ち学園やってませんって事、かな…。」

そう独り言ちていると、　有紀の執事のミネさんが見えた。

「澪梓様、こちらで御座います。」

「……は、ぃ」

あー、やっぱ駄目だ。怖い。こういう態度は失礼なの知ってるけど、駄目だ。

「ふふ、私は大丈夫ですよ。では、参りましょうか。」

「……」

ミネさんいつれられて、１つ目の城の最上階に行った。

勿論エレベーターで。

コンコン

「滝紀さま、失礼致します…」

ガチャッ……

2―3

「ああ、初めまして。愛川澪梓君だよね？」
「は、い」
「ごめんね、無理しなくてもいいよ。」
「（コク）」
「そうだね、それでいいよ、はは」

「さて、欧咲学園入学おめでとう。見事入学試験も通ったことだし、今から君は列記とした欧咲学園の生徒だよ。」
「（コク）」

「では、今から学園の説明していくね。　この学園はご存知の通り大きな会社の社長のご子息とか
茶道の家元のご子息など、まあ簡単に言えば金持ちの家の子が通う学園って事は知ってるよね？」
「（コク）」
「そういう子達が集まってるからかな…、ここの子達は家柄をとても気にするんだよね。
だから、この学園では家柄がいい子が権力を持つんだよね。」
「（コク）」
「それでね、この欧咲学園は幼稚舎の時から寮生活をしてるせいかね、
女性と会う機会は乏しいんだよね。
でも、人間いつかは恋愛するもんでしょ？けれど、恋愛対象の女性がいない…

となると、誰が恋愛対象になるか…わかる？」
「（…コク）」
「そう、やっぱり頭がいいみたいだね。」

滝紀さんが言いたいのは、この学園の人の恋愛対象は男ってことだ。
でも、土日祝日に外出することも可能だから、
ちゃんと女性を好きな人も居るって。

まとめると、この学園は8割がゲイとバイってことだ。
残りの2割がノーマル。

「それで、澪梓君みたいに美人だと狙われやすいと思うんだよね…」
「……」
「最低限の配慮はするけど、自分の身を守れるのは自分自身だからね。
澪梓君も注意してね。」
「（コク）」

「はい、じゃあ、次は学園の説明かな？」
「（フルフル）」
「ん？いいのかい？」
「…お、ぼえて、ます」
「…ほー、さすがだね…。それじゃあ、お気をつけて。楽しい学園生活になりますように。」
「しつれい、しまし…た（ペコ）」

あー、頑張らないと……

.

2―4

理事長室を出て、俺は自分の部屋に向かった。

この欧咲学園は、３つの城が並んである。

一番左が寮の城だ。

１階がロビー兼娯楽施設
２階がコンビニ、スーパー、大浴場、食堂など日常生活の場所
３―４階が１年生が生活する場所と休憩場
５―６階が２年生が生活する場所と休憩場
７―８階が３年生が生活する場所と同じく休憩場
９階が生徒会専用の空間

真ん中の城が教室がある場所。

１階は職員室、食堂などがある場所
２階は音楽室、理科室、保健室など特別教室がある場所
３階が１年生が利用する教室
４階が２年生が利用する教室
５階が３年生が利用する教室
６―７階は生徒会室
８―９階は理事長専用室

右端は教師専用で、学園の教師の生活スペースとなってる。

俺の部屋は、５階の５０５号室だ。
普通は２人部屋らしいけど、有紀の計らいで俺は１人部屋だ。
嬉しいけど、申し訳ない。

そんなことを考えながら、歩いていたら、誰かとぶつかった。

「っ」
おでこが痛い…。

「ああ、すまない。」

聞きなれた声に驚いて、上を見上げると、そこには顔見知りが居た。

「…たつにぃ？」
「澪梓…？お前、澪梓か？！」
「うん、そーだよ」
「何で此処に…？」
「…有紀から聞いてない？」
「何も…」
「俺、此処に入学してきたんだよ。」
「は？」

「一週間前有紀に誘われたんだ。あ、大丈夫だよ。試験ちゃんと受けた。」
「あ、ああ。そうか、有紀が誘ったのか…。」
「うん」
「それならいいが、お前大丈夫なのか？」
「なにが？」
「その、この学園いっぱい人が居るぞ。しかも、同性愛者が殆んどだし…。目を付けられたら
強姦……って事も良くあるんだぞ。」

「……大丈夫、ではない…」
「お前な、」
「でも、有紀が誘ってくれたし、たつにぃも居るし、俺大丈夫だよ」
「あ、ああ、そうだな。お前は俺が守ってやる。」
「うん、有難う。たつにぃ、大好きだよ」
「おう、俺も澪梓のこと大好きだぜ。」
「ははっ、じゃあ、俺部屋に行くから、ばいばい」
「ああ、何かあったらすぐに電話するんだぞ。」
「うん、分かってるよ、有難う」
「じゃあ、気をつけろよ。」
「うん、ばいばい」

久し振りにたつにいと会って、気持ちが軽くなった。
うん、大丈夫そう。頑張ろう…。

2欧咲学園　終

3

＊3　部屋

たつにいと別れて少し進むと部屋に着いた。
この学園内で現金にも鍵にもなるカードを
扉の取っ手の上にある画面に翳(かざ)し、鍵を開けた。

中を見渡すと、本当に広い部屋だった。
元々2人部屋用に作られてるとはいえ、
俺が住んでいたアパートの3倍ぐらい大きい。

白を基調とした、木が多く使われている部屋。
温かみがあるけど、どこか高貴な感じ。
この学園ではあまり使われることの無いキッチンも設備されてある。
大浴場もあるらしいが、部屋に1台ずつ風呂もある。
その風呂も大きいのだ。
大人の男3人が入れるほどのスペースがある浴槽に
六畳ほどの浴室。
しかも床と壁は大理石だ。

無駄すぎる…。
部屋でこんなに広いなら、大浴場はどんなものだろうか…
見てみたい気もするが、大浴場はいろんな人が使うので多分一生見
れないんだろうな、。

共有スペースを見た後、個人スペースを覗いた。
向かい合わせにある扉。
２人部屋だったら１人１人がどちらかの部屋を使うんだろう。
だが、俺は１人だ。

「どっちを使おうかな…」

中を覗いてみると、造りは違った。
右側のドアを開けると、フローリングの洋風って感じでベッドがあった。
左側のドアを開けると、畳があって、障子があって…など和風な部屋だ。

俺はどちらかと言うと和風の方が落ち着く。
けど、前のアパートでは布団だったため、ベッドも憧れる…
なんて思ってたけど、この部屋には俺１人だけなんだから、
好きなときに好きなほうを使えばいいという結論にでた。

部屋の設計を見終わったら、一気疲れてきた。

今日は落ち着く和風の部屋で寝ることにする。
布団を敷いて、その中にもぐりこんだ。

畳の匂いが良い感じに心を癒してくれる。
静かに瞼を閉じると眠気が襲ってきた。

今日は疲れた。
とりあえず、これからのことは明日考えよう…
今日くらい、ゆっくり休んでもいいでしょう……？

３部屋　終

4－1

＊4　関わり

『澪梓、お前の所為で俺達は死んだんだぞ。』
ごめんなさい、ごめんなさい

『そうよ、あなたが飛び出さなかったら私達は今でも生きていたのに…』
ごめん、お母さん、ごめん、ごめんね

『お前なんて庇わなければ良かった』
そうだよね、俺なんて庇わなければ2人とも生きてたのにね…

『なぜ私達が死んであなたが生き残ってるの？』
ごめんなさい、俺が生き残ってごめんなさい…

『『お前が死ねばよかったのに』』

ああ、そうだよね、俺が死んでれば良かったのに…
何で俺が生きてるんだ…

父さん、母さん、ごめんね……

.

4―2

「……っ」

……。

いやな夢だ。

眠気に任せて安定剤を飲まずにいた所為か。

てか、俺安定剤飲むの忘れすぎだろ…

と苦笑し、俺は時計を見た。

時計の針は午後3時を回ったところだ。

微妙な時間に起きてしまった…。

目覚めが悪かったせいか、眠気が吹き飛んだ。

睡眠薬を飲むって言う手もあるけど、

折角夜中に目が冷めたんだ。

今頃殆んどの人が眠りに付いてるだろう。

昼間は他人に会うのが怖くて外を見ず、下ばかり見て歩いてたので、

丁度良いし今から散歩しよう。

思い立ったらすぐ行動。

いくら温暖化が進んだからと言って4月の夜はまだまだ寒いという

ことと、

もしも人と会った場合を考えて

分厚めのパーカーを着て、フードを深く被り、外に出た。

夜と言っても、寮の廊下は電気がついていて、明るい。

道に迷うことなく、寮の外にでた。
寝ている間に雨が降ったのか、地面がかすかに濡れている。
雨が降った後と、夜中という事もあって、冷たい空気に鼻がツンとする。

…とても良い雰囲気だ。
静かで落ち着くし、周りに生えている木の匂いに癒され、無駄なことを考えないで済む。

街頭の下にあるベンチを見つけ、そこに腰掛け、静かに目を閉じた。

風が吹く音、風に草木がなびく音、寮の庭の真ん中にある池に、草から水滴が落ち、
ポチャンという音が規則正しく、静かな空にこだまする。

嫌な夢を見た後だからだろうか、この瞬間がとても幸せに思える。
誰も居ない、俺だけの空間。
瞼をゆっくり開けて、空を見上げると、雨が降っていたはずなのに、
星空がくっきりと見えており、

静かで、綺麗で、儚い。

また今度、有紀と来よう。
有紀を俺だけの空間に。有紀なら、許してあげる…。

.

4―3

そう考え、そろそろ帰ろう、と立ち上がり、寮へ戻ろうと踵(かかと)を返そうとしたとき
目に誰かの影が映った。

知らない人だったらやばい、と思い今度こそ踵を返し、帰ろうとした。
というか、この学園で知ってる人はたつにいと有紀と滝紀さんとミネさんだけだから、
知らない人の確立が遥かに高いのだ。
しかも、滝紀さんとミネさんの事も知っているけど、
ニガテなので、どちらにしろ会いたく無いのだ。
そして、一歩足を踏み出そうとしたとき、

「澪梓」
「…え？」

声を掛けられ、ビックリして振り返り、声の主をよく見ると、
それは有紀だった。

「え、有紀？」
「うん、そうだよ。」
「なんで此処に居るの？」
「書記の仕事してて、疲れたから気分転換に外に出てみれば澪梓が居てさ。

声掛けようと思ったけど、なんかあまりにも綺麗だったから、眺めてた。」
有紀はそういいながら微笑んだ。
「なっ、俺綺麗じゃない！もっと早く声かけてくれれば、よかったのに。
て言うか、今度は有紀と一緒にこの景色みたいなって、思ってたところだったんだ。」
「馬路で？嬉しいな、ははっ。澪梓ったら可愛いんだからっ！」

有紀はそう言うなり、いきなり抱きついてきた。
体格に差があるから、俺は重さに耐え切れず、こけそうになった所を有紀が支え、ベンチに座った。
…俺を膝の上に乗せて。
しかも、向かい合わせにだ。

「ちょっと、何コレ。恥かしいよ、有紀」
「澪梓は可愛いから大丈夫だよ」
「関係ないし、可愛くない！てか、降ろしてよ、ゆきぃ…」
「だーめ。俺と見たかったんでしょ？なら見ようよ、」
「俺は、有紀の膝に乗って見たいとか、言ってない！なんか、近いし！」
「俺はこうして見たいなー、て思ってたよ。俺のお願い聞いてくれないの？」
「う…。有紀のばか…」
「うん、良いよ。俺は満足」

有紀は意地悪な笑みを浮かべた。

「有紀は、意地悪だ…。」
「澪梓があまりにも可愛いから、だよ。澪梓が悪い。」
「な、俺は悪くない！有紀が悪いんだよ。」
「まあまあ、良いじゃないのー」
「良くないーっ」
「それよりさー、兄貴と会ったんだって？」
「あ、うん。部屋に向かう途中にさ。バッタリ。おかげで、気持ちが軽くなったんだ。
　たつにい、相変わらず心配性だったよ。」

軽くはぐらかされたと思ったけど、言おうと思ってたことだったので、今日会ったことを伝えた。

「澪梓の事だからな。兄貴、澪梓のこと本当の弟みたいに可愛がってるからさー。
　本当の弟に対しては只の意地悪な兄だけどな」

「でも、2人とも仲いいよね。俺、有紀とたつにぃと一緒に居るの、大好き。」
「あ、ああ。俺も澪梓と居るの大好きだよ」
「嬉しいー、なんちゃって」

俺がクスクスと笑うと、有紀は顔を真っ赤にした。
（澪梓可愛すぎる！その笑顔むやみにさらさないでー！）
なんて思ってるなんてしらない俺は、そんな有紀をみてさらに笑う

のであった。

有紀としばらく話して、寮に戻った。
布団に入る前に、今度はちゃんと安定剤を飲んだ。

今日は、嫌な夢も見たけど、最終的に有紀と会って、気持ちが落ち着いた。
やっぱ、有紀は凄いと思う。
今度は、たつにいと有紀と俺とであの景色を見たいな…。

そんなことを考えながら、俺は眠りに付いた――

４関わり　終

5

＊5　贅沢

ピピピピ

「…ふぁ、よく寝た……」

昨日、有紀と会って落ち着いたおかげか、安定剤のおかげか、
目覚めが良かった。
目覚まし時計を止め、障子ごしに指す太陽の光をぼんやりと見つめ、
障子を開ける。そこは5階なので高い位置からの景色で、
和風造りの部屋とは違い、洋風な寮の庭が見渡せた。

少し頭を掻きながら部屋を出て、リビングに行った。
…、そういえばご飯どしよう。
食堂もあるみたいだけど、人が多いから却下。
コンビニで買うのもアリだけど、人と接触するし…。
だからと言って、食料があるはずも無く。

まあ、朝ぐらい食べなくても大丈夫だろう。
それより、昨日お風呂に入ってないな。
風呂の内装は見たものの、その後眠くなってすぐ寝たし。
それに昨日、嫌な夢を見た所為であの時汗かいてたしな…。

一応、目覚ましは早めにセットしてあるので、風呂に入る時間は十分にある。
ということで、お風呂に入ることにした。

折角だから、湯船にも浸かりたいところだけど
お湯を溜める時間も考えると、登校時間ギリギリになってしまうので
湯船に入るのは諦め、シャワーで我慢することにした。

シャワーだけといえど、やはり広い風呂に入るのと、前の家の狭い
風呂に入る気分はずいぶん違う。
俺の部屋は、大理石造りだけど、部屋につき、ヒノキ風呂などもあ
るらしい。
ヒノキもいいなー、など思いながら、やっぱり大理石は贅沢すぎる
よ。と思った。

たまには贅沢するのも大切だと思うけど、大理石はちょっと…。
庶民の俺にしては贅沢すぎて、戸惑う。
風呂のみじゃなくて、大体からしてこの学園はお金を使いすぎと思
う。

城が3つもあるってどうなんだろう。
それに、生徒会専用室はなくて良いと思うし、
建物自体が無駄に大きいし、カードシステムとかも、無駄に画期的
すぎる。

此処に住むと価値観がおかしくなりそうだ。
俺は昨日入ったばっかりだけど、この部屋といい、学園の外観といい、寮の庭といい、
凄い事が多すぎて、逆に普通に思えてきた。

俺も馴染むの早すぎとは思うけど、昨日きた俺がこうなんだ。
今までずっと此処ですごしてた人は余計なんだろうな…。

そういえば、有紀も時々学園を抜け出していたと言っても、
やはり学園で過ごしてたには違いない。確かに、有紀は金払いが良かったし…。
贅沢しすぎると価値観も金銭感覚もおかしくなるのかな…

気をつけないと…

5贅沢　終

＊6　担任

シャワーを浴びてさっぱりした所で、制服に着替えた。
広い風呂場を満喫していたら、思った以上に時間をかけていたそうだ。
入学式もとい、始業式は、あと２０分で始まる。
俺は、風呂に３０分ほど入ってたことになる。
しかも、シャワーだけでだ。

俺、そこまで風呂好きじゃなかったはずだけど…。
でもまあ、あの広さに戸惑ったからしょうがないよな。

そして、急いで制服に着替える。
新品なので、パリパリしてるカッターシャツを着て、その上から黒のカーディガンを羽織る。
そして灰色のスラックスを履いて、赤色のネクタイを付ける。

普通にどこにでもありそうな制服だけど、素材がいいらしくて、制服だけで６桁越すんだって。
いい加減金かけすぎだろ。

そろそろ、時間もやばくなったので現金兼鍵のカードを持って部屋を出る。

そういえば、昨日滝紀さんから、

『澪梓君は新入生だから、始業式の前に職員室に行って担任の先生と体育館に来るように』

て言われたんだった。

それじゃあ、先に職員室に行くんだよね。

担任ってどんな人だろう…。

不安だ。けど、行くしかない。

もう全員体育館へ向かったのか、廊下には誰も居ない。

俺は寮を出て、職員室へ向かった。

庭には、さすがに1人2人と人が居たけど、

誰も俺には気づいて無いみたいだ。よかった。

職員室の扉の前に立ち、ノックする。

――コンコン

「し、つれい、します…」

そう言い、ドアを開ける。

すると、中にはいろんな人が居た。

職員室だから当たり前だけど、俺の途切れ途切れの喋り方と、初めてみた顔に驚いたんだろう。

中の人が俺を見てる。俺はびっくりして、うつむいた。
すると、

「澪梓、こっちだ」
と、聞きなれた声がした。

声のしたほうを見ると、たつにいが居た。

「た、つにいっ」

俺はそういってたつにいに駆け寄った。
すると、もっと視線を感じた。たつにいって呼んだのがいけなかったのかな。
俺は少し後悔する。

「大丈夫だ。俺が居るだろ？澪梓は俺が守るから。」
そう耳元で囁かれ、少し恥かしくて頬を染める。
「うん、有難う。大丈夫だよたつにい。」
俺も小声でそうつぶやく。

すると、たつにいは笑った。

「俺がお前の担任、山中達紀だ。お前は、2年S組だ。　それじゃ

あ、体育館行くか。」
「うん」

それからは、いろんな人に見られたけど、隣にたつにいが居るから安心して体育館に迎えた。

担任の先生がたつにいでよかった。でも、たつにいが先生ってちょっと笑えるな。
有紀も同じクラスみたいだし、安心だ。

何だかんだいって、俺は2人に甘えてると思う。
いつも俺を守ってくれる2人には感謝しないとね。

6担任　終

7―1

＊7　入学式

たつにいと体育館に入った。
もう殆(ほと)んどの人が来てるみたいで、体育館には人がいっぱい居た。
幸い、皆雑談してるようで、俺が入ったことには気づいて無い。

「それじゃあ、俺は教師専用席に行くから。　澪梓は、一番左の列に行くんだぞ。
　有紀が待ってるから、有紀の横に並べ。」

「…分かった」
「大丈夫だって。有紀が付いてるから。」
「うん…」

そういい、少し不安だけどたつにいと別れた。
周りを気にしながら、２―Ｓの列に向かった。
列の一番後ろに、有紀の姿が見えた。
俺はすこし駆け足で有紀のほうへ向かった。

「ゆきっ」
「ん、澪梓！やっときたー。心配したぞっ」
「ごめん、たつにいと一緒に来てたんだ。」
「そっか、兄貴と一緒なら良かった。」

「うん、心配かけてごめんね。」
「いいよ、可愛いから許すっ」
「うあ、ちょ、ゆきっ。苦し…」
「おっと、ごめん。」
「ふあっ、も、ビックリした…」
「ごめんごめん。つい。それより、もう始まるみたいだぞ」
「ん。」

『これから、欧咲学園高等学部の始業式を始めます』
どこからか声が聞こえ、皆がいっせいに黙る。

『まず最初に、理事長の挨拶です』
そう誰かが言うと、舞台袖から理事長が出てきた。

「進級おめでとう。今年度も気を引き締めて取り掛かるように。」
と短い挨拶を終えた。
「澪梓、耳ふさいだほうがいいよ？」
「え？」
有紀がそう言ったけど、俺は意味を理解できなかったのだ。
まあ、すぐ後で理解できたんだけどね。

『続いて、生徒会会長からの挨拶です』

という声が聞こえた。

『ぎぃいいいいいいいやああああああああああああああああ！！！！！！！！！！』

瞬間、野太い声があちらこちらから聞こえてくる。
これは、キャーなんて言う可愛いもんじゃない。まさしく、ぎぃやあなのだ。
俺は肩を跳ねさせて、横に居る有紀を見ると、耳を押さえていて、苦笑した。
ああ、さっきの意味はこれか、と。

そして、生徒会長らしき人物が舞台に上がる。すると、先ほどよりも大きな叫び声が聞こえた。
俺も咄嗟に耳をふさいだ。

『黙れ。』
その声が響いた。さっきまでの叫び声が嘘のように消え去った。

『始業式の挨拶なんかより…。新入生とやらは、何処に居る？』

え、新入生？それって俺のこと？

『新入生って、噂になってた奴か？』
『本当に新入生が来たの？』
『なんで泰雅様が新入生のことを気になさってるの？』

『うるせー。新入生は今すぐ名乗り出ろ。』

シーン……

「ちょ、澪梓、新入生ってお前のことだよな」
「た、多分…。名乗り出ろって…。え、出た方がいい、のかな…。」
「そりゃ出たほうがいいだろうけど、お前名乗り出れんのかよ」
「…無理」
「どーするよ…」

……どうしよう。

.

7―2（前書き）

テスト週間なので最新少し遅れました；；

7―2

どうしよ…。出たほうが、いいのか、な。
や、でも、無理だし。

有紀と少し屈んで目立たないようにして、コソコソと話し合う。
すると、なにやら不審に思ったのか、前の列の人が不意に振り返った。

「「あ、…」」

『え、お前、誰？』

多分、その人は俺を目立たそうとかそういうのを考えていたんじゃなくて、
ただ見知らぬ人が居たから発した言葉なんだろう。
でも、その言葉に反応して、その人の周りに居た人達が数人振り返った。

『うわ、チョー綺麗…』
『新入生…？』

などと振り返った人達もそれぞれ言葉にする。
すると、やはり同じようにその周りの人は反応して…。

そして俺達の前の列がザワザワしだした頃、誰かが俺を指差しながら言った。

『会長！！そこに居ます！』

そう言われた瞬間、体育館の中に居る全員といっても過言では無い数の人が
俺を一斉に見る。
そう、沢山の人が俺を見つめてるのだ。
これは、少し耐えられないかも。

「ゆ、き・・」
「ん、ああ。大丈夫だよ。」

周りの目線に耐えられず、咄嗟に有紀の制服を掴む、少し震えた俺の手。
有紀は、それに気づくなり有紀は優しく微笑んで、
俺よりも一回り大きい手のひらで優しく俺の手を包み込んでくれた。
これだけで、少しは気が楽になる。
ああ、有紀はやっぱりすごいな…

7―2（後書き）

うあー、グダグダ…。
もう少し頑張ります。

7―3

そんなことを考えて、些か現実逃避気味の俺。
なんの反応も示さない俺に苛ついたのか、事の発端の人物はどんどん俺に近づいてくる。
いや、実際俺は現実逃避してたから気づかなかったけど、
有紀の手に力が入ったから、なんだろうと思って顔をあげると
生徒会長が舞台の上ではなく、俺の数メートル先に立っている。
否、そこからさらに近づいてくる。

「え、っ」

あっという間に目の前に現れた人物に俺は戸惑いを隠せず、
咄嗟に有紀の後ろに隠れ、
有紀とつなぐ手に力を込めた。ら、有紀も握り返してくれた。

「あ？なんで逃げんだよ…。ん、有紀じゃねーか。何してんだ。」
「鳴海先輩こそ、公衆の面前でなにしてるんですか。」
「俺が何しようと俺の勝手だろう。それより、ソイツ渡せ。」
「はっ、相変わらず自分勝手ですね。この子は渡しませんよ」
「あ〝ん？　てかお前、俺様が命令してるのになんで新入生が居るって言わなかった。」
「そりゃー、鳴海先輩に渡したくないからですね。」
「いい度胸してんじゃねーか、」

「お褒めに預かり光栄に思います。」
「てめー、心が篭ってねーんだよ。」

有紀と生徒会長の言い合いが少し怖くて、有紀とつなぐ手の力をまたまた強めた。

「何？どうしたの？」
「……ゆき」
「？…ああ、怖かった？」
「…ん、」
「そっか、怖がらせてごめんね。」
「……だい、じょぶ」
「ふふ、強がっちゃって可愛いな。　…てことで先輩、この子が怖がってるんで、
　さっさと舞台戻っちゃってくれませんか。」

「は、？なんで怖がってんだよ。つか、俺ソイツに会いに来たんだけど。」
「この子は先輩に会いたくないそうですよ？　さあ、戻ってください。式も進みませんし。」
「誰が戻るかよ…。おいテメー、出てこねーと後でどうなるか分かってんのか？」

え、俺に聞いてるの？てか、俺だよね。
分かりません、分かりたくありません。出たくもありませんっ

「先輩、脅すのは止めてくれませんか？　そういう事をしたら余計嫌われますよ。」

「なっ、　くそ野郎」

.

7―4

「そうですよ泰雅（たいが）。そんなに睨むとウサギちゃんが怯えるので止めてくれませんか？」

そういう言葉が聞こえた。
俺は誰かと思いキョロキョロあたりを見渡すと、
生徒会長の後ろに、その人が居た。
生徒会長は、ワイルド系？なイケメンだけど、
その人は会長とはまた違った知的な美形だ。

てか、ウサギちゃんって俺…？

「んだ理玖（りく）。邪魔すんじゃねー」
「泰雅は相変わらずですね。式が進まないんですよ。」
「そんなこと俺にはカンケーー」
「さっさと戻れと言ってるんです。私の邪魔をしますか…？」
「…わかったよ、戻る。」
「それでいいんですよ」
「「「「……」」」」

一瞬、この知的美形の人が悪魔…、いや、鬼に見えた。
急に黒い雰囲気を醸（かも）し出したかと思えば、さっきよりも一段階低めの声を発したんだ。

これには有紀も俺も、そして生徒会長もびびったらしい。
生徒会長は、大人しく舞台へ戻った。

「有紀、泰雅がご迷惑お掛けしました。」
「三代(みしろ)先輩が謝らなくても」
「いえ、私の配慮行き届いてなかったという事ですので。
其方の方も、怖がらせてしまったようで、すみません、」

三代先輩と呼ばれた人は、本当に申し訳なさそうに謝ってくれた。
だから、俺も隠れてるのは失礼なんじゃないか…。と思って、有紀の横に並んだ。

「だ、いじょうぶ…です、」
「それは、良かった。　お2人とも、本当にうちの会長がご迷惑お掛けて申し訳ありませんでした。
　それでは、私もそろそろ…。失礼しました」

そう言って三代先輩も戻っていった。
俺は会長と有紀と三代先輩に気を取られて忘れていたけど、
そういえば今って式中じゃないのか…？
俺は恐る恐る周りを見渡した。

すると、そりゃーもう沢山の人が、こっちを見ていた。
バッ。そんな効果音が出るほどすばやく俺はうつむいた。

『いつまで気を散らしているのですか？式を再開しますよ』

三代先輩がそう言うと、こっちを見てた人達が一斉に前を向いた。

ああ、良かった。

入学式もとい始業式は、生徒会長で中断されたものの三代先輩が再会してくれて、

次からは俺のほうに注目するなんて事も無く、無事終了したのだ。

7入学式　終

8

＊8　クラス

入学式も終わって、俺は有紀とたつにいに連れられて、他の人よりも先に体育館を出た。

「澪梓、大丈夫か？」
「あ、うん。大丈夫だよたつにい」
「澪梓、ごめんなー。俺がついていたのに。てか、俺も怖がらせちゃったし。」
「大丈夫だよ、有紀。有紀は守ってくれたじゃん」
「…うん、ありがとう。」
「へへ、」

「それより澪梓、今からこの学園のクラス説明をするから、ちゃんと聞けよ。」
「うん。」

「えっとな、クラスは全学年S，A，B，C，D，E，Fの7個に分かれてるんだ。
　クラスの分け方は、学力・運動神経・財力が重視されている。」
「うん」

たつにいが言うには、

Ｓクラスは、勉強・運動・家柄が抜きん出ている人達が集まり
Ａクラスは、Ｓクラスには及ばないけど、勉強・運動・家柄が良い人達が集まってて
Ｂクラスは、運動は出来ないけど勉強が出来る人
Ｃクラスは、勉強は出来ないけど運動が出来る人
Ｄクラスは、勉強も運動もいまいちだけど、財力がある人
Ｅクラスは、どれも並な人達が集って、
Ｆクラスは、問題児とかが集まったクラス

ってことらしい。

「んで、澪梓。朝言った通り、お前はＳクラスだ。
それと、Ｆクラスってあったろ？　Ｆクラスはどういう奴が集まった所か覚えてるか？」
「問題児の人とか集まったクラス」
「そう。Ｆクラスは、問題児が集まったクラスなんだ。
Ｆクラスの中では殴り合いの喧嘩なんてザラだ。
まあ、中にはいい奴も沢山居るんだが、８割ぐらいの奴は喧嘩っぱやくて、
会えば殴る蹴るの暴行をしてくる奴も居るんだ。」
「…」
「だから、Ｆクラスには十分に気をつけろ。」
「うん」

「まあ、クラスの説明はコレくらいかな。」

「じゃあ、兄貴、澪梓、そろそろ皆も出てくるだろうし、先に教室

に行こうぜ。」
「ああ、そうだな。　それじゃ、行くぞ」
「うん」

とりあえず、Ｆクラスの人には注意しよう。

８クラス　終

9―1

＊9　無自覚

有紀とたつにいにくっ付いて歩く俺。
この2人と並ぶと、どうしても俺が小さく見えるんだよね…。
いや、実際小さいほうだからいいんだけど。いいんだけどね。
でもやっぱり、男としては大きいほうがカッコイイからね、。

「…ぅー」

そう思ってたら、無意識に唸って、2人より前に出てた。
ほら、前に出たらちょっと大きく見えるかな？と思って。

「？どうかしたか、澪梓。」
「どうしたの？」

「え、あのね、2人は背が高くていいなーって思って。
前に出たら俺も少しは大きく見えるかなって思っただけ。」

（（何！この可愛い生き物！！））

「澪梓はそのサイズが合うと思うぜ。」
「俺もそう思う。澪梓は今のままでいいよー」
「でもさぁ…。俺だって、あと3センチで170なのに…」
俺は少しいじけて、頬をぷぅっと膨らます。
じゃあ、2人とも「ブンッ」って効果音が鳴りそうなくらい速く顔を背けた。
あ、ひどい…。そんなに見てられないほど今の顔ぶさいくだった？
（（ちょ、可愛すぎ！　無自覚なのも困りようだな…））
.

9―2

「と、とりあえず、もう教室だぞ」
たつにいが、ちょっと顔を赤らめてそういった。

「それじゃあ、俺先に教室入っとくから」
有紀がそう言って、教室に入っていく。

俺とたつにいは、教室の隣にある控え室に入って
クラスの全員が教室に入るのを待つことにした。

「ほら、飲め。俺特製のココアだぞ」
「わぁ～、たつにぃありがと～」

たつにいの作ってくれたココアを受取って、猫舌な俺はふーふーしてから飲む。

「ぁち」

冷ましたんだけど、やっぱりまだまだ熱かった。
俺は火傷しちゃって涙目になりながらヒリヒリする舌をべーっと出した。

「大丈夫か？」
「ぅん、ちょと舌ヒリヒリするー」
「ふっ、氷でも舐めとけ」
「ぬー…。」

たつにいは意地悪そうにそういって、氷を出してきた。
しょうがないので、それを口に含む。

「はふひいのいひはふ（たつにいのいじわる）」
「ふはっ、なに言ってるか分かんねーよ」
「うぅー」

「それより、もうそろそろ皆教室に入ったんじゃないか？」
「…ん、もう行く？」
俺は口の中にある小さくなった氷をゴクンと飲み込んで、
たつにいにたずねた。

「おう、行くぞ。気合入れろよ」
「ん」
「大丈夫、俺と有紀が付いてるし。」
「ありがと、大丈夫」

俺は、自分の両頬をペチンッと叩いた。
ちょっとジンジンするけど、気合が入った気がする。

9―3

そしたらたつにいが一歩踏み出した。

「俺が呼んだら入って来いよ。」

「うん。」

～ガラガラ～

『ぎゃあああああああああああああ』

たつにいが教室に入った途端に体育館の時程では無いけど、野太い声が教室で響いてた。

やっぱり、８割がゲイとバイってだけあるんだな。

「静かにしろー」

たつにいがそう一言言うと、いっきにシーンとした。

…と思ったら、また次の瞬間からザワザワとしてきた。

『山中先生カッコイイ！！』

『抱いてぇぇ！』

『今日も美しい…』

『抱かれたい…』

とか色々聞こえてくる。
抱いてってゆーのは、まあそういう事だよね。
まあ、うん、思うのは個人の自由だとおもう。

「今日は皆知ってる通り、転校生が来た。」

『知ってる！体育館に居た子でしょ？！』
『あいつ、可愛かったよな…』
『でも、鳴海さまに近づくなんて…！！』

なんて1人でうんぬん考えてると、いつの間にか俺の話にすり変わってた。

.

9―4

「静かにしろ。今からそいつを紹介する。
愛川、入って来い」

あ、呼ばれた。
深呼吸をして少し震える手でドアの取っ手を掴む。

〜ガラガラ〜

ドアを開けて、手招きしてるたつにいの横に向かう。
クラスメイトからの視線が痛いけど、気づかない振りをして。

「それじゃあ愛川、自己紹介してくれ。」

「…愛川、澪梓で、す。よろし、く…お願いし、ます」
前を向くと、沢山の目がこっちを見てたから、俯き気味に短いけど、
精一杯大きな声で自己紹介をした。

「おし、」
といって、たつにいが微笑む。
俺も釣られて薄笑いを浮かべた。

『（可愛い）』
とクラスの皆が思ってるなんて知らずに。

「愛川の席は、あの窓際の席だ。」
そういって、たつにいが1つ開いてる席を指差す。

「わかり、ました」
俺はその席へ向かう。
席へ向かうとき、

「可愛い」
「抱きたい」

とか言ってる人達が居た。
少し目眩がしたけど、もう少しで席に着くので頑張って耐えた。

席に向かうとき俯いてたから気づかなかったけど、
俺の後ろの席が有紀だった。

席についたら、有紀が笑いかけてくれた。

「良く頑張ったね」

「う、ん。ありがと」

いつも有紀と話すときは詰まったりしないんだけど、今も視線を感じるので、少々言葉が詰まる。

.

9―5

「それじゃあ、ＨＲはじめるぞ」

俺が席に着いたのを確認してたつにいがＨＲを始めた。
このクラスの人達は１年生のときも全員Ｓクラスだったらしくて、
自己紹介とかも無くＨＲは進んだ。

ＨＲが終わって、休憩時間。
俺がボーっとしてると、有紀が後ろから話しかけてきた。

「よっ、大丈夫かー？」
「う、ん。だいじょぶ」

そういって、有紀が俺の頭をなでてくれる。
有紀になでられるのは好きだ。だから、無意識に目を細めて有紀の
手に頭を摺り寄せる。

有紀（可愛いっ）

「ん、澪梓は相変わらずだなぁ」
「うん、」
「それより、やっぱ詰まっちゃうのな。」
「…う、ん。ごめん、ね…？」
「ううん！無理しなくていいんだよ～。　それに、２人きりになれ

ばいつでも聞けるからね」
最後のほうは耳に口を寄せて小声で囁いてきた。
俺ははずかしくて、一気に紅潮する。

「ちょ、ゆきっ。やめ、」
「ごめんごめん。」

絶対ごめんって思ってない。
まあ、許すけど。

そっからも少しじゃれてると、前の席の子が振り返った。

「なぁに〜？有紀君と転校生君は知り合いなの〜？」
振り返った子は、ミルクティー色のふわふわでくるくるした髪を靡かせて
大きなこげ茶色の瞳で俺と有紀を交互に見ながらそういってきた。

「…」
すごい可愛い子だ。女の子に見える。

「ねー？」
もう一度たずねてきたけど、俺は黙り込む。
すると、有紀が答えた。

「ごめんな、この子あんまり人と話すの得意じゃないんだ。
澪梓とは、幼馴染！！　可愛いからって、手ぇ出すなよ？」

「そーなんだー！　逆にこっちこそごめんね！　怖がらせちゃった？」

「…（フルフル）」

俺は頭を横に振って、大丈夫だと伝える。

.

9―6

「てゆぅか有紀君！僕が転校生君に手出すわけないでしょぉ～？
大体、僕ねこだし～、ねこ×ねこじゃ進まないじゃん～」

と、可愛い子が理解できない単語を出して有紀と話していた。

「それに、僕には心に決めた拓也（たくや）ってゆー大事な恋人が居るんだからっ」
「ん、なになに、俺がどうしたのー？」

そういって、その子の隣に今度は美形さんが立っていた。

「あ、たっくやー！！　今ね、僕には心に決めた拓也って恋人が居るんだよって話してたの！」
「馬路で、嬉しい事言ってくれるよな、莉兎（りと）はっ！」

そういって、拓也さんらしき人物は、莉兎って名前らしい先ほどの可愛い子に抱きついた。

「ふふっ、だって僕には拓也だけだもんっ」
「俺にも莉兎だけだよっ！」
「いやんっ、恥かしぃ／／／」
「見せ付けてやろーぜ？」

そういって、2人は俺達の前で堂々とキスをした。しかも、深いほうだ。

「…ん、ふぅ」

「…はっ」

2人は1分間ほどキスをしていた。

莉兎さんの顎には飲みきれなかった唾液が一筋に流れていた。

拓也さんは、そんな莉兎さんを満足げに見て、莉兎さんの唇を赤い舌でペロッと舐めて離れた。

「…」

見てるこっちが恥かしい。俺は赤面して、2人の方から顔を背け有紀の方を見た。

有紀は慣れているようで、苦笑いしながら俺の頭にポンポンと2回手を乗せた。

「おい、そこのお二人さん、皆見てるよ?」

「…えっ、あぅ、恥かしい…」

「見せ付けるって言ったろ? わざとだよ、わざと。　莉兎に変な虫がつかないよーにね。」

「拓也っ、大好き／／」

「俺もだよ」

2人は抱き合う。

またキスしようとしているのを有紀が気づいて、２人を引き剥がした

.

9―7

「あっ…、ひどい有紀君っ！僕と拓也を引き離すなんてぇ…」

そういって、莉兎さんは泣き出してしまった。
有紀を見たら、少し困った顔をしながら拓也さんを手で押して莉兎さんと離そうとしていた。

「莉兎ー！」

拓也さんは、有紀の手を払おうとしていたが、それが無理で悔しそうにもがきながら莉兎さんを呼んでいた

「拓也…！！」

「…お前らなぁ、いい加減にしろ。俺が悪者みたいだろ。」
その通りだ。まるで、何もして無い２人のカップルを悪役が引き離してるように見える。

「有紀が悪いだろ！」
「いや、お前らがクラスの真ん中でイチャイチャしてるほうが悪い。」

「う、ひっく、たくやぁぁ」

莉兎さんはまだ泣いてる。
俺はどうしようかとオロオロした。
泣いている人を泣きやます方法を1つだけ俺は知ってる。そして、覚悟を決めた。

莉兎さんの頭に手を伸ばして、2，3回頭を撫でる。
そして、少し屈んで顔を覗きながら、出来るだけ優しい声で喋りかける

「莉兎さん、だい、じょぶ？　泣かない、で…？」

そういって、少し微笑む。
これは、母さんが俺が泣いていた時よくやってくれたこと。
俺は、母さんがこうすると、必ず泣き止んだ。
それで、昔は泣き虫だった有紀も、こうするとすぐに泣き止んだ。

「…も、う、　だぃじょぉぶ…」

莉兎さんも泣き止んでくれた。

「そぅ。よか、た」
俺はそういって、もう一度微笑んで、莉兎さんの頭を優しく撫で、手を離した。

.

9―8

俺が莉兎さんから手を離して、有紀の方を見ると
有紀と拓也さんが、顔を赤く染めて少し驚くように俺を見てた。

「…な、に？」
俺は変なことをしただろうかと不安になりながら尋ねた。

「え、いや、莉兎を泣きやませるとかすげーって思って…」
「それに、澪梓が可愛かったから…」
拓也さんに続くように有紀が言った。

「…？」
よく分からなかった。

「や、莉兎はさ、１回泣いたらもう全然泣き止まないんだよ。
それを一瞬で泣きやませたからさ…。　ちょっとびっくりした」
「俺は、澪梓の笑顔がとてつもなく可愛かったなーと…」

「可愛く、ないっ」
俺はそういいながら有紀を少し睨んだ。
すると、ますます有紀が赤くなった。
訳が分からん。

「も、かわいすぎるからっ！」
そういって有紀が抱き付いてきた。
くるし…。
これは抱きつかれてるじゃない。押しつぶされてるだ。

「…ゆきぃ、おも、たい…」
有紀に押しつぶされてるせいで少し掠れた声。

.

9―9

「ちょ、澪梓、今の声はやばい」
頭上から有紀の声。またしても理解できない

「…な、んで？　てか、有紀、おもい、って」
俺はおもいきり有紀の胸を押して、有紀から解放された。
やっと新鮮な酸素が吸えた。

「あ、ごめんな、澪梓」
有紀はやっと俺が苦しがっていたことに気がついたのか、今更だけど謝ってきた。

「……。苦しかった、なぁ？」
俺はそういって、有紀を睨む。

有紀はあたふたしながら謝ってくる。

「ご、ごめん！そ、そのっ、つい！！　えっと、すいませんでした！」

俺は、そんな有紀が面白くて、ついクスクスと笑って

「も、いい、よ。許して、あげる」

そういってあげた。

すると、周りからヒュッと息を呑む音が聞こえた。

俺が振り向くと、クラスメイトの人達が全員顔を真っ赤にして俺に視線を向けていた。

え、真っ赤になるほど、怒らせた…？

「ゆ、き…。」

俺は何したのか分からなくて有紀に助けを求めた。

「んえ？　ああ、違う違う。皆怒ってないよ？」

さすが有紀。俺が言わなくてもちゃんと何を聞きたいか伝わってる。

「…じゃぁ、な、んで？」

「ああ、気にしなくていーの、大丈夫だから。」

「で、も」

「俺が大丈夫っつったらだいじょーぶ！

それより、澪梓はもう少し自分の外見を自覚しようね？」

そういって、有紀は俺の頭を撫でる。

自覚って方は良くわかんないけど、有紀が大丈夫って言ったから大丈夫。って、俺も思う。

「？　分かった。」

とりあえず、そういって俺はまた微笑む。

すると、周りの人達はさらに顔を赤らめた。

まあ、もう俺は大丈夫だけどね。

その頃クラスメイトは…

可愛すぎる！！

天使の笑顔だ…

やべ、突っ込みてぇ

うお勃った！

喘がせてぇ

などと考えていた。

一部の生徒を除いて――――

９無自覚　終

10－1

＊１０　先生の嫌がらせ

休み時間が終わって、教師が入って来た。
１時限目は数学のようだ。
はっきり言って、俺は色々あってアメリカの大学を卒業しているから
今から習う授業は復習にしかならない。
まあでも、復習は大事だし、勉強も嫌いではない。
それになにより、後ろに有紀の気配がするから、俺は黙って授業を
受けた。
それなりにノートも取っていた。

授業も終盤にかかった頃、先生がチョークを置いて、こちらを見た。
俺は先生と目が合った。先生は、すごく嫌な感じでニヤニヤしてた
から、冷や汗が流れた。

「愛川、編入祝いに１つ問題を解け。」

そういって、先生が黒板を指差しながら、またニヤニヤと笑う。
クラスメイトの、小さい子達が俺のほうをチラチラ見て、くすくす
と笑う。

…。これは、俗に言う嫌がらせ、という物なのか？
なんで、いきなり。さっき挨拶したばっかりなのに、何で…？

だんだんと、俺の顔は俯きだす。
それを見て、先生がまたニヤニヤと笑ったのは、俺の目には入らなかった。

「なんだ？編入テスト1問間違いの天才の愛川には、コノ問題は簡単すぎたか？
しょうがない、それじゃあ、これを解け。」

そういって、先生が新しい式を黒板に書いた。
最初の式も、きっと高校3年生ぐらいにならう問題で
一般の2年生の生徒には解けないような無いようだったのに、
新しく書かれた式は、大学レベルの式だった。
まあ、解けるけど…。

「おや？分からないのかね？」
『クスクス。いい気味。』
『ほぉんと。鳴海様と山中君に近づくから…』

ナルミサマ？なるみ、どこかで聞いた気がする。

10―2

なるみ、なるみ。
なるみ…？

鳴海。　ああ、分かった。

鳴海。　鳴海泰雅（なるみたいが）。
始業式で会った、生徒会長の鳴海泰雅。

鳴海さま―――。会長に俺が近寄った？いったいいつ？どこで？今日の体育館でのこと？
俺、一言も口聞いてないよ。
接触しただけで、嫌がらせされるのか？？

それと、山中君って、有紀のこと？
有紀とは、口利いたし、普通に話してた。
接触が駄目なら、話すことも駄目ってこと…？

なんで？話すのも駄目なの？
会長は、いい。関わりたくない。
でも、有紀は、有紀はさ、駄目だよ。

有紀を俺から引き離したら、それこそ
さっきの莉兎さんのように
俺は取り乱しちゃう。泣きじゃくるよ？暴れるよ？
だから、有紀はだめだよ、

『呆然としちゃって。』
『クスクス、恥かいちゃえ』
『一生、鳴海様と山中君に近づくな』

ヒソヒソと聞こえてくる、悪意の篭った言葉。
ああ、どうしよう。目の前が真っ暗になっていく。
有紀、助けて———

.

10―3

「いい加減にしろよっ！！」
後ろで怒鳴り声が聞こえた。
有紀が怒った声だ。

有紀の怒鳴り声で、さっきまでクスクス笑ってた人達も、ニヤニヤしてた先生も、
一気に静かになった。

「澪梓？大丈夫か？」
有紀は、後ろから俺を抱きしめる。

「だい、じょぶ…」

もう少しで堕ちそうだったけど、大丈夫。有紀が助けてくれた。

「あいつ等の言う事なんて、気にすんな。　俺が守ってやるから。
――だから、泣くな」

え、俺泣いてる？　そう思って、目に手を持って行った。
ああ、泣いてる。俺泣いてる。

有紀が離れてくって考えたからかな、
きっとそうだ。今考えても胸が張り裂けそうになるもん。

「ん、ごめ、ん。だいじょぶ。　ありがと、有紀。」
「いや、俺こそごめんな。さっさと止めとけばよかったのに。」
「うう、ん。有紀は、全然悪く、ない…」

ああ、泣いたからか、眠くなってきた。瞼が重い…。
最後に、これを言っておかないと…。

「せん、せ。」
「あ、ああ、何だ。」
「その式、答え…　S（2）＝4／3…で、す…」

それを伝えて、有紀の腕の中で、先生の悔しそうな声を聞きながら
俺の意識はブラックアウトした。

―――『せ、正解だ…』

（10－1）

有紀ｓｉｄｅ

澪梓が休み時間に莉兎を泣き止ませてから少しして授業が始まった。

数学の教師－－田中は、鳴海先輩の親衛隊のと繋がっていて、鳴海先輩に近づく奴に嫌がらせをしたりと、色々評判が悪い教師だ。

今日の始業式で鳴海先輩が澪梓の元へ来た。

相変わらず頭の悪い奴だ。そんなことをしたら澪梓が目を付けられるのは分かりきってるのに。

それに、嫌な予感がする。

田中はニヤニヤと嫌な笑みを浮かべてるし、親衛隊の奴らはクスクスと笑っている。

何もおきなければいいけど…。

授業も終盤にかかったころ、田中が澪梓に言った。

『愛川、編入祝いに１つ問題を解け。』

俺が顔をあげると、先ほどよりニヤニヤした顔の田中が澪梓を見つめていた。

澪梓は、少し俯く。それを見て田中がさらに嫌な笑みを深めた。

『なんだ？編入テスト１問間違いの天才の愛川には、コノ問題は簡単すぎたか？
しょうがない、それじゃあ、これを解け。』

田中が、新しい式を書いた。　あれは、大学の問題だろ？
普通の奴が解けるはずが無い。

これは、明らかな親衛隊からの嫌がらせだ。
そう理解して、段々と俺の眉間の皺が深くなる。

『おや？分からないのかね？』
『クスクス。いい気味。』
『ほぉんと。鳴海様と山中君に近づくから…』

澪梓が黙ってると、田中が嫌味にそう言って、親衛隊の奴らが小声でつぶやく。

やはり、会長か。それに、…俺。

不本意だが、俺にも親衛隊は付いている。今回の嫌がらせは、
鳴瀬先輩の親衛隊は勿論のこと、俺の親衛隊も絡んでるらしい。

澪梓は、また段々と顔を俯けていき、今にでも机に倒れていきそうなほどだ。

『呆然としちゃって。』
『クスクス、恥かいちゃえ』
『一生、鳴海様と山中君に近づくな』

それに追い討ちを掛けるように親衛隊の奴等がコソコソという。

.

（10－2）

「いい加減にしろよっ！！」

俺は、耐え切れなくなってそう怒鳴った。
前にある澪梓の背中がビクッと反応した。

でも、その背中がとても悲しそうで、寂しそうだったので俺は安心させるように、
澪梓の背中をゆっくりと抱きしめた。

「澪梓？大丈夫か？」
そう言って、先ほどの怒鳴り声は感じさせないように、優しく、優しく声を掛けた。

「だい、じょぶ…」

澪梓はそういったけど、全然大丈夫そうじゃない。
それに、澪梓の肩に回した腕に、小さな雫が落ちたから。

「あいつ等の言う事なんて、気にすんな。　俺が守ってやるから。
　――だから、泣くな」

そう、澪梓は泣いていた。傷ついたって事だ。
澪梓は、泣いていることに気づいていなかったのか、驚いたように、
自分の目に手を持って行った。

「ん、ごめ、ん。だいじょぶ。　ありがと、有紀。」
「いや、俺こそごめんな。さっさと止めとけばよかったのに。」
「うう、ん。有紀は、全然悪く、ない…」

いや、俺が悪い。さっさと止めて置けばよかったのだ。
なんて俺はこんな無力なんだ。

泣いたから眠くなったのか、澪梓が腕に掛けてくる体重が段々増えていく。

眠り堕ちる寸前に、

「せん、せ。」
「あ、ああ、何だ。」
「その式、答え…　S（2）＝4／3…で、す…」

そう、澪梓は黒板の式の答えを呟いた。
暗算したと言うことだ。

その答えを聞いて、田中が悔しそうに
正解を認めた。

俺は、澪梓が眠ったのを確認して、周囲を睨みつけ、澪梓を抱いた

まま保健室に向かった。

有紀ｓｉｄｅ　終

11

＊11　安心

「んぅ…」

ここ、どこ？
さっきまで教室に居たはずだけど…？
俺は辺りを見渡した。

俺は真っ白なベッドに寝ていて、ベッドの周りには真っ白なカーテンがあった。
この雰囲気は保健室？
有紀が連れて来てくれたのかな。

俺は上半身を起した。少し目眩がした。

有紀を探すためにカーテンを開けた。
やっぱり保健室みたいで、同じようなベッドがあと5つ並んでいた。
部屋の中には包帯や消毒液が並んである棚もあった。

しばらく部屋を見渡してみると、有紀が居ない。俺を寝かしてくれた後教室に戻ったのかな？
どうしよう。

小学校の頃では、保健室から帰るときは先生に一言言って行かない

といけないルールがあった。
この学校もそうなのかな？
もし、そういうルールが無かったとしても、
常識的に考えて、世話になった場所を出るときは挨拶をしていかないと失礼だろう。

けど、その挨拶する相手の保健の先生が見当たらない。
置手紙でもしたほうがいいのか…？
俺が悩んでいると、ドアが開いた。

「…お？目が覚めたかな？」

ドアから、白衣を着て眼鏡を掛けた優しそうに微笑む男の人が入ってきた。
きっと、保健の先生だ。

「は、ぃ。迷惑かけ、て、すいません…でした」
「あはは、いいよいいよ。それより、もう大丈夫かい？」
「はい…。　ありがと、ございました」
「うん、どう致しまして。」

そういって、保健の先生は微笑んだ。
ああ、なんかこの人好きだ。って思った。

「せん、せ。」
「ん、どうしたの？」

「名前…」
「ああ、僕は村田（むらた）　想真（そうま）って言います。よろしくね、愛川澪梓くん」
「むら、たせんせ。　　よろ、しく」
「うん。よろしく。」
本当、何か好きだこの人。安心できる。

「また、来ても、いいです、か？」
「いいよ、何か合ったらいつでもおいで？」
「ありが、とう…ございま、す。　しつれい、しました…」
「はい、さようなら」
「さよ、なら」

俺は、安心できる空間を見つけた。

１１安心　終

11（後書き）

あ、はい。なんか無理やりって感じですね↑
ごめんなさい。

とりあえず、村田先生は澪梓の癒しの場所にしようかと（

12―1

＊12　胸騒ぎ

村田先生と挨拶をして別れてから、どれぐらいの時間がたっただろう。
今俺は見たことの無い廊下を1人　彷徨(さまよ)っている。つまり、道に迷っている。

なんせ、寝ている間に運ばれたってことで道を覚えているはずもなく。
学園の説明書に地図が載っていて、それを一応読んで大体の道は覚えていたはずだけど…。

どうしても保健室から教室への帰り道が思い出せない。
とりあえず、俺は今2階に居る。それは分かる。
保健室が2階にあることは覚えているから。
それで、2年生の教室は4階にあるから今俺は4階を目指してるんだけど…。

4階に上がる為の階段が見当たらない。
あ、この学園はエレベーターもあるんだっけ。
まあどっちにしろ、4階に行く手段が無いのだ。

一度は保健室に戻ろうと思ったけど、村田先生は忙しいだろうし。
それに来た道を覚えていない。　なんか今は全然頭が回らない。

寝起きだからかな？

此処で止まっておく事も可能だけど、知らない人に見つけられて案内されるのも御免だ。
だから俺は１人２階を彷徨ってる。

んー、どうしよう。本当に。　何気なくポケットに手を突っ込んでみたら、何かが手に当たった。

「ん、なんだ？」

手に当たった物を掴んで出すと、携帯があった。

「え…。」
なんで携帯のことを忘れてたんだ俺。

やっぱりなんか変だ。頭が回らない。いや、頭は回ってるか。ふらふらするもん。
や、なんか違うか？　ああ、頭じゃなくて目が回ってるんだ。

１人で意味不明なことを考えながら、有紀にメールした

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
２０××／　４／１２　１１：３４
Ｔｏ：有紀

ｓｕｂ：迷った。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

有紀、道に迷った。

ここ、どこだろう。

　　　澪梓

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

そう送って、１分もしない内に有紀からメールが来た

・

１２―２

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

　２０××／　４／１２　１１：３４

Ｔｏ：有紀

ｓｕｂ：Ｒｅ：迷った。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

今何階？

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

何階だっけ。ああ、確か２階か。

なんか暑い…。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

　２０××／　４／１２　１１：３５

Ｔｏ：有紀

ｓｕｂ：Ｒｅ２：迷った。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

２階。

澪梓

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

そう送ったら、有紀から電話が来た。

「もしもし？」
『澪梓？2階に居るんだよな？』
「うん。」
『周りに何がある？』
「理科室」
『じゃあ、そこ動かないで。今から行くから』
「分かった」

そういって電話は切れた。多分もう少ししたら有紀は来る。
てゆうか、時間的に今は授業中だよな。
ああ、勝手に1人で迷っとけばよかったなぁ。
有紀を巻き込んじゃった。

・

12―3

俺を探すために有紀が授業サボったら、色々迷惑だよな。
有紀の成績が悪くなるかも。
そう思ったら、勝手に手が動いて有紀に電話してた。

『もしもし？』
「有紀、やっぱいい。１人で帰る」
『あー？いいよ、今向かってるし。』
「でも、迷惑でしょ。大丈夫だよ、帰れる」
『大丈夫だって。もう着くし。』
「いい。教室戻って」
『はぁ？　もう無理。見つけたし』

それで電話は切れた。周りを見渡したら廊下の先に有紀が居た。

「なに、いきなりどうしたの。」
そういって有紀は俺に近づいた。

「別に、なんでもない。大丈夫。」
「そ？なんか澪梓変。」
「なんもない…」
「てか、何か顔赤くねぇ？」

「そう？」
「うん、何か赤い。熱でもあんじゃない？」

有紀は俺の額に触れた

「あっつ、澪梓、熱あるって。絶対」
「ん、だいじょーぶ」
「大丈夫じゃねーって。高熱だと思う。」

ああ、そっか、だからなんかフワフワして頭が回らなくて目が回ってるのか。

「そんなこと無いって。それより、早く教室行こ？」

多分、本当に熱はあるけど、そういったら有紀はまた
俺の為に授業サボって保健室に連れて行くだろうから、黙ってる。

「…澪梓、俺に気使うなよ」
「……使ってない」
「嘘。使ってるだろ。　大丈夫だよ。俺生徒会してるから。
　生徒会の特権って奴で授業免除されてるから。」

「でも」
「でもじゃねー。　良いって。大丈夫。」
「……。」
「ああもー、俺が大丈夫っつったら大丈夫なんだって言ったろ？」

「う、ん」
「だから、澪梓は甘えればいーの！」
そういって澪梓は俺の手を引っ張って歩き出した
.

12―4

有紀に腕を引っ張られて歩いてたら、保健室の前に付いた。
あ、また道見るの忘れた。
ちょっと後悔してたら、また有紀に引っ張られて保健室に入った。

「村田せんせー」
「はいはーい。あれ？山中君と愛川君。どうしたの？」
村田先生が奥の方から出てきた。

「なんかコイツ、熱あるみたいなんです。」
「俺は、だいじょ「大丈夫じゃないだろ。大人しく熱測れ」」
有紀がそういって体温計を渡してきた。って、勝手にそんなことしていいのかよ…
そう思って村田先生を見たら、「大丈夫だよ」って目で俺を見つめ返して来たから、
ならいいか。と、体温計を脇(わき)に挟んだ。

3分ぐらいすると、ピピピピと高めの機械音が鳴った。

「愛川くん、貸してくれるかな？」
村田先生がそういって手を差し出した。
俺は黙ってその手に体温計を置く。

先生はそれを見るなり驚いたように少しだけ目を大きくした。

「んー、高いね。どうする？保健室で寝る？それとも寮に帰る？」
先生は俺に問いかける。

「何度だったんですか？」
有紀が先生に問いかける。

「はい」と言って先生が有紀に体温計を手渡す。
有紀はそれを見ると「え？！」と言って俺を見る。

「澪梓、大丈夫か？！やっぱ高熱じゃん！」
「な、んど？」
「３９．５度！！」

おお、高熱だ。俺は平熱が３５度台だから余計か。

「…大丈夫、です。教室、戻り…ます」

12―5

「駄目！澪梓、帰るぞ」
「…えー」
「えーじゃない！部屋で休め！」
「……」

初日から早退は嫌だ。ちゃんと授業を受けたい。
まあ、今既に授業に出てないけど。

「駄目だって。」
「有紀…」
「…駄目」
「…ゆき、」
「…だ、め。」
「……ゆきぃ」

「……」
「……」
「……あああぁぁ！！いいよ！！けど、５時限目までここで寝とけ！！
５時限目になっても熱下がんなかったら帰るからな！」

んー、なんかそれ早退と同じような感じがするけど…。
でもまあ、５時限目までに熱が下がってれば授業に出れるなら、今から寮に帰るよりはマシか。

「わか、た。」
「うし、寝ろ寝ろ。」
有紀は俺をベッドにグイグイと押してくる。
俺はそのままベッドに倒れこんだ。

「あ、ごめん」
「ぅー…」
「ごめんってー」

そう言いながら有紀は俺の頭をよしよしと撫でる。

その手の温かさが心地よくて、俺の瞼はだんだんと重くなっていく。

「おやすみ…」
有紀はそういって俺の額にチュッと軽くキスをした。

いつもならとても恥かしいだろうけど、今はそれも心地よくて俺はまた眠りに落ちた。

.

12―6

有紀ｓｉｄｅ

澪梓が寝た後、村田先生と話をした。

「澪梓、大丈夫ですかね」
「熱はすぐ引くと思うよ。」
「そうですか…。」

「生活環境が変わったから、ちょっと体が付いていけなかったのかもね。」
「……。」
「他に思い当たる事があるのかな？」

思い当たるといえば、やっぱり教室での出来事…。

「…その、教室で俺の親衛隊と鳴海先輩の親衛隊と、田中先生からの嫌がらせが…。
それで意識失って、さっきここに連れて来たんです。」
「そっか、それじゃあ、精神的ショックってのも入ってるのかもね。」

「はい…」
「でも、多分大丈夫だよ。山中君と一緒に居るときの愛川君、とても安心したような顔してたからね」

「そうですか…。でも、俺の所為で澪梓は…」
「山中君の所為じゃないでしょ？」
「でも俺の親衛隊ですし…」

「けど、山中君が直接なにかしたわけじゃないでしょ？」
「…はい」
「教師の立場の僕は、親衛隊の子達が一丸に悪いとは言えないけど、
あまり人の気持ちを考えれて無いよね。」
「はい」

「それと、田中先生か…。　そうだね、あまりいい噂は聞かないね。
少し理事長と話し合ってみるよ。」
「すいません…」

「気にしないで？　僕達は生徒のみかただからね。」
「ありがとう御座います。」

村田先生は、いい先生だと思う。
本当に、生徒を一番に考えてるという事が伝わってくるんだ。
とりあえず、村田先生と理事長の叔父さんに任せておけば、田中の
ことはどうにかなると思う。

それにしても胸騒ぎがする。
なにもなければいいけど。

１２胸騒ぎ　終

13―1

＊13　騒動

「……」
目が覚めた。なんか右手が異常に暖かかったから右手のほうに目を持っていくと
有紀が俺の手を握りながら寝ていた。

「有紀」
俺は名前を呼びながら上半身を起して有紀の頭を撫でる。

すると有紀は　ぅー　と唸りながら身じろいだ。
それが可愛くて、俺はクスクス笑いながらまた同じことをする。

「ゆーき。」
「…ん……。れい、し？」
「うん。ずっと一緒に居てくれたんだ？」
「うん、澪梓の手暖かくて気持ちよかった…」

有紀はまだ眠いみたいで欠伸をしながらそう答えた。

「それより、澪梓はもう大丈夫？」
「うん、気分もだいぶ楽。」
「よし、んじゃあ熱測って。」

俺は体温計を受取り脇に挟んだ。

ピピピピと、また高めの機械音が鳴った。
「何度？」
「３７．２度」
「んー、ちょっと高いのな。」
「でも、大丈夫。　いいでしょ？」

「…しょうがない。微熱ってことで許してあげる」
「ありがと」

２人でクスクスと笑う。

「ねえ有紀、俺お腹すいた…」

朝ぐらい食べなくてもいいだろうって思って朝抜いたけど、
そういえば学園に来てから何も食べて無い。
昼は家を出る前に食べてきたけど、夜ご飯を食べる前に俺は寝たんだった。

「ん、了解。今１時だから、丁度昼時だしな。　どこで食べる？」
「どこがある？」
「学食、コンビニ　かなぁ。」
「…」
「コンビニで俺が買って来ようか？」

それは嬉しいけど、迷惑掛けるわけには行かない。

「いい、学食行こう。」
「いいのか？」
「大丈夫。」
「分かった、それじゃあ行こう。」

13―2

保健室を出てから有紀と一緒に学食へ向かう。
廊下では度々人とすれ違って、視線を感じたけど
横に有紀が居るから特に気にせず歩いた。

「澪梓、ここ。」
有紀が映画館の扉みたいな、大きい扉の前で立ち止まった。

「おっき…」
「そ？　普通じゃん？」
「……」
「ま、いっか。入るぞ」

有紀が扉に手を掛けて、ゆっくりと押す。それに伴って扉もゆっくりと開く。
扉の間から見えた中身は、驚くほど豪華だった。

有紀が扉を完全に開けて俺を引き連れて中に入っていく。
俺は有紀の手首を掴みながら付いていく。

中身は、扉の間から見るよりも豪華だった。

天井には大きなシャンデリア。
床はフワフワしたクリーム色の絨毯。

机と椅子はお洒落なカフェにありそうな机や椅子。
それに、図書館にあるような長いしっかりした机や椅子。

その上に、白いレースのテーブルクロスが置いてあって、バラやゆりの入った花瓶、
赤色のキャンドルも立ってある。

極めつけは、天井だ。
まさかのガラス張り…。　青い空が覗いて、十分な日光を注いでくる。
シャンデリアがある部分だけ天井になってあり、その一部分には細かく天使やらの彫刻が彫られてる。

これは後から有紀に聞いたんだけど、雨の日とかは天井が出てくるんだって。
なんか、スイッチを押したら横からシャンデリアの一部だけの所と同じ柄の天井が
ウィーンって出てくるらしい。　画期的すぎんだろ。

それと、学食の広さが尋常じゃない。
どこのお城かと思うほどにでかい。
まあ実際この学園は城だけど。

「うわー。」

俺は正直引いた。此処までなのか、欧咲学園。

13－2（後書き）

ああ、自分の説明力の無さが身にしみます…。
特にガラス張りの天井の部分！w

表現の仕方難しかったですw
とにかく豪華って伝わっていることを願います（

13―3

『山中様が来てる！』
『めずらしー…』
『てか、あの横の子って今朝の新入生じゃない？』
『そういえば…』
『かわいー』
『けど、山中様の手を掴むなんて…』

『新入早々山中様に近づくなんて許せない。』
『そういえば、始業式でも山中様と一緒に居たよね。』
『それに、鳴海様と三代様とも…』
『図々しい…！』

陰口にもならないほどの声で、俺に悪意を込めた言葉が飛び交う。
俺は、その中の1人が発した「山中様の手を掴むなんて」と言う言葉に、
有紀の手首を掴んでいたことを思い出して、急いで離す。
有紀は不満げに俺を見る。俺は気にしないフリをする。

「それじゃあ、あそこに座ろ」
ちょっと不貞腐れたように有紀が1つの席を指差す。
そこは、周りを柱で囲まれて、あまり人目に付かない所だ。
なんだかんだいって、有紀は気が利く。

「うん」
そういって、少し前を歩く有紀を追いかける。
そのときも周りが色々言ってきて、有紀が周りを睨む。
すると、周りは静かになった。

.

13―4

そんなことをしてると、その席に着く。
有紀の向かいに俺が座る。

「どうやって、注文するの？」
「このパネルで予約してから、カード通して代金払ったら、注文完了だよ」
「ん、ありがと。　なに食べようかな？」
「俺はーー、ん、和風定食。」

へー、そんなのもあるんだ。
昨日の昼は、卵焼きと味噌汁とご飯だったから、今日は洋風な気分。

「俺は…、オムライス」
実は、オムライス大好き。
有紀は知ってるから、「本当、好きだなー」と笑う。
俺は、バカにされた気がして脹れる。だって、有紀いつも『オムライスなんて子供っぽい』って言うんだもん。
美味しいのに子供っぽいも大人っぽいも関係ないのにさー。

「有紀は、オムライスの美味しさが分かってないんだー…」
少し頬を膨らませながらブーブー言う。

「ごめんごめん。澪梓が可愛いからさ。」
有紀はクツクツと喉を震わせながら笑って、俺に謝ってくる。
ていうか、澪梓が可愛いからとか、時々有紀は訳の分からないことを言いだす。

「…別に。」
「そう脹れんなってー」
有紀はポンポンと俺の頭を撫でる。
俺は、また子ども扱いされてると感じて、有紀の肩を小突く。

すると、一気に周りがうるさくなる。
少し軽率な行動を取り過ぎた。
さっきから周りの反応を見て、俺が有紀と仲良くするのは好ましくないんだろう。
でもまあ、有紀と仲良くしないってのは無理だから、せめて俺が有紀に触れるところとかは
あまり周囲の人達には見せないほうが良い。
俺は少し反省する。

そんな俺を見て、有紀が眉間にしわを寄せる。

.

13―5

「澪梓は、遠慮しないで良いんだからな。何かあったら俺が守るし。」
「…うん」
「なに、今の間は。」
「大丈夫、その分2人の時はいつも以上にくっつくから」
そういうと、有紀がまたクツクツと笑う。
「まあ、そういう事ならいいけどね」
いいのかよ。俺も可笑しくて笑う。
そんなことをしてると、料理が来た。
俺は料理を並べてくれた人に、
「あり、がとうご、ざいます」
って、スムーズにとは行かなかったけどお礼を言った。
すると、その人は一瞬驚いたように目を丸め、後に頬をほんのりと染めながら
「ありがとうございます。」と優しい声を残して厨房に消えた。
「…澪梓、誰彼構わず唆し過ぎ。」
有紀が飽きれた様に俺に言う。
「え？」
「…まぁ、いいや。とりあえず、食べよ。」

「うんっ」

実は、目の前に大好物のオムライスがあって、我慢するのがしんどかったところだ。
うずうずしてた手を一気に動かしてスプーンを掴んでオムライスに突き刺す。
有紀はそんな俺を楽しそうに眺めながら、自分のご飯に手をつける。

「おいひぃ～」
うまい！美味すぎる！！　上に乗っかってる卵はとろとろしてて、その上のデミグラスソースがなんともいえない！

「こんな美味しいオムライス、初めて食べた…」
「そんなに美味しい？」
「うんっ！」
「一口ちょーだい？」
「いいよ、はい。あーん」
「んー」

スプーンに一口台乗せて、有紀の口に持っていく。
有紀もそれに答えて口を開く。
その瞬間、周りから息を呑む音が聞こえた。

13―6

「…なぁに、楽しいことしてんだぁ？」
まだ有紀の口の中に俺のスプーンが入ってるときに、俺の後ろからそんな声が聞こえた。
有紀は目を大きく広げて、固まる。
俺は、後ろに立つ人が誰か確認するために振り返って、固まった。

後ろには、会長の鳴海先輩が居た。その後ろに、有紀に三代先輩と呼ばれた人が
ニコニコしながら立っている。

有紀は正気を取り戻したみたいで、スプーンから口を離す。
俺はそれを感じて、鳴海先輩から目を外し、前を向く。

「…なんで鳴海先輩がここに居るんですか」
有紀がいつもより数段低い声で唸るように呟く。
俺は少しビックリして有紀を見ると、有紀は鳴海先輩を嫌そうに眉を寄せながら睨んでる。

「ああ？お前には関係ねーだろ。俺はコイツに会いに来たんだよ。」
「はっ、関係大有りですね。先輩は何も考えないで行動してるんでスカ。」
有紀が嫌味っぽく言う。

「なんだと…」
「三代先輩も、鳴海先輩が変なことする前に止めて下さい。」
「そう言われましてもねぇ。このバカは言い出すと止まらないもので。」
三代先輩がニコニコを絶やさずにそういう。
「…はぁ。」
有紀はそれを聞いて、大きな溜息を吐く。

「んだよ！！お前ら俺に喧嘩売ってんのか？！」
「鳴海先輩、先輩がこういうところに来ると、注目されるの分かってここ来てるんですか？
もしそうなら、本当最低な方ですね」
「…」

鳴海先輩が怒ってきてるのが分かる。

「てめぇ、いい加減にしろよ」
鳴海先輩の声が低くなる。
「それはこっちの台詞ですね。」
有紀の声も一段と低くなる。
そんな2人に挟まれる俺。これ、今朝もあったよね。

「2人とも、山中君が怯えているでしょう？」
「あっ、澪梓、ごめんね？！ついカッとなっちゃって…」
「…チッ」
「だいじょぶ、です」

有紀があんまり焦って謝ってくるから、ちょっと面白くて頬が緩みながらそう伝える。
一応先輩も居るので、敬語で。
すると、3人は固まる。

「…？」

また何か気に障るようなことをしてしまっただろうか。

「ちょっとこい！」

.

13―7

「えっ」
鳴海先輩は、そう言うなり俺の腕を掴んでズカズカと歩き出す。
俺はビックリしながらも、引っ張られてる体勢だから転ばないように必死になって着いていく。
有紀は「ちょ！」と言いながら追いかけてくる。理玖先輩はクツクツと笑いながら俺達を眺めてる。

「なにしてんですか！」
有紀が声を荒げてそう言いながら、
俺達に追いついて、俺が鳴海先輩に掴まれてる方の逆の手をグイッと掴む。
鳴海先輩はそんなことお構いなしに前方に足を進める。
それを有紀が腕を掴んで止める。

俺は2人の間で、腕を左右に引っ張られた状態で突っ立ってる。
グイグイと左右から腕を引っ張られるもんだから、俺の腕はヒリヒリと痛む。

「おい有紀、離せ」
「先輩が離してください」
「お前が離せ」
「先輩が離してください」

何回もそのやり取りを繰り返しながらも、まだ俺の腕を引っ張る2人。
もう、俺の腕は限界だ。
「ふ、たりともっ、離してくだ、さいっ！」
俺は腕の痛みに耐え切れなくて涙目になりながらそう叫んで有紀と鳴海先輩を交互に睨む。

「ごめん…」
「…」
有紀は謝るなり腕を離した。鳴海先輩は、無言で腕を放した。
やっと開放された俺の腕は、重力に逆らわずだらんと垂れた。

13―8

「ごめんね、澪梓…」
有紀はまだシュンとしてる。でも、今回は簡単に許さない。
本当に腕がちぎれるかと思うほど痛かったんだ。

「…」
俺は無言。有紀は焦る。

「澪梓、澪梓ごめん」
何回も俺に謝る。だんだんとその目は涙で潤んでくる。
でも、俺は無言。どころか、有紀を軽く無視する。

「れ、いし」
有紀は今にも泣き出しそうな声で俺の名前を呼ぶ。
俺はしょうがないと、ハァと短く息を吐き、有紀を見る。
有紀は、やっぱり両方の瞳に零れそうなほど涙をためていた。
それをみてちょっと苦笑いがもれる。

「も、いい。」
そんな俺の短い言葉にも、有紀は顔を輝かせる。

「澪梓、ありがとっ」
そう言って俺に飛びつく。なんか有紀は、大きな犬みたいだ。
俺は有紀の頭をヨシヨシ。と撫でる。

すこしして、有紀は俺から離れる。そして、さっきの弱気な有紀の目つきとは違って、
鋭い目つきで鳴海先輩を睨む。

「鳴海先輩は、何のつもりだったんですか。」
「あ？お前には関係ねーだろ。」
「澪梓をどこにつれてく気だったんですか。」
「お前にはかんけ「早く答えてください」…」
「…」

「俺の部屋行こうとしただけだ。」
「何のために。」
「あんな顔みた後だぜ？そっから家ですることなんて決まってんだろ」
「…」
「なんだ？知りたいのか？　　家に連れてって、押し倒して素っ裸にして
　白い肌を眺めてからそこらじゅう触りまくって、あんあん喘がせながらあそこに俺のモン突っ込んで
　足立たなくなるまで犯してやろうかとおもってよ。」

ニヤニヤしながら、周りには聞こえないような声で、俺と有紀にそう囁く。
俺はそれを聞くなり青ざめる。鳴海先輩の口から淡々と聞こえる卑猥な言葉。

13―9

意味を考えるなり、気分が悪くなっていく。
段々俺は後ろに立つ有紀に体重を掛ける。有紀は、多分怒ってて、怒りで震える手で
俺の肩を優しく掴む。

「そういえば、お前は男とヤッたことあんのか？　どうせなら処女の方がいいよな」
ニヤニヤしながら鳴海先輩が言う。
「まあ、そんな可愛い顔してたら男が寄ってくるんだろうよ。まさかの淫乱か？」
「テメェ」
有紀は俺の肩を掴む手に少しずつ力を込める。
俺はそんなこと気づかずに、頭の中で先輩の言葉を繰り返す。

―白い肌を―
―あんあん喘がせながら―
―俺のモン突っ込んで―
―犯してやろうかと―

―男とヤッたことあんのか？―
―まさかの淫乱か？―

――本当、綺麗な白い肌だね――
――可愛い声で喘いじゃって――
――僕のモノが欲しい？――
――今日は朝まで犯してあげる――

――僕の男とヤッたらお仕置きだよ？――
――そんな顔しておねだりするなんて澪梓は淫乱だね？――

鳴海先輩の言葉と連鎖して、苦しい記憶が蘇る。

13－9（後書き）

いやぁ、なんか鳴海先輩が嫌な奴になってしまったw

１３－１０（前書き）

今回は少しシリアスな感じです。

13－10

思い出すなり、俺の体は恐怖に震える。

「…め…なさ…」
「…澪梓？」
「ごめ、なさ」
「…」
「…い、やだ…や、だ……。ゆるし、て…」
「澪梓、」
「ひ、ろさんっ、やだ」
「澪梓っ」
「い、や……やだあああぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁっあぁ！！」
「澪梓！大丈夫！大丈夫だよ！　弘さんは、ここに居ないよ！」
「やあぁあっあぁぁ！　いやあぁっやだぁっ」

有紀が俺を抱きしめる。いつもはそうされるだけで俺は落ち着くのに、
今は抱きしめてくれてるのが有紀だって分かってるのに、怖くて、
気持ち悪くて、
俺は有紀の腕の中で暴れる。

ドンッと今までよりも強いちからで、有紀のことを押す。
有紀は尻餅を付く。
その瞬間に、ハッと気づく。
有紀のことを突き飛ばしてしまった、と。
俺はそう思うなり、さっきとは違う理由で泣き喚く。

ただひたすら、嫌だと叫ぶ。叫びすぎて声が掠れる。
一体何分ないてるんだろう。
そういえば、此処は食堂だったな。　あれ？でも生徒が居ないや。
あ、そっか。さっき予鈴なってたし、もう教室に向かったのか。

これ異常ないほど大声で泣きながらも、俺の中に冷静なことを考えてる俺も居た。

鳴海先輩は、俺の左側に居て、驚いたように呆然と立っている。
理玖さんは、すこし焦ったように有紀に話しかける。
有紀は、床に座り込む俺の前に立っていて、悔しそうに拳を作りながら、
理玖先輩に指示されたのか、どこかに電話を掛けてる。

.

１３－１０（後書き）

あはは↑
シリアスな場面を書いてみたくなったら、こんなんなっちゃいました。
ただ澪梓が叫びまくると言う…。
次回は穏やかな感じにしようかと！！

グダグダですねぇ。
まあ、個人の趣味に走っちゃってる感じなんで、お許し下さい☆↑

13―11

多分、俺が泣き始めて２０分ぐらいした頃に、食堂の扉が勢いよく開いた。
泣きながら扉に視線を寄せると、そこには息を切らしたたつにいが居た。

「おい有紀！どうしたんだ！！」
「後で話すから、澪梓を！」
「チッ」

有紀と話した後、たつにいがこっちに来た。俺はまだ泣いてる。

「やだぁ、やなのおぉ！！　た、つにぃっ！たす、け…！」
俺はたつにいに助けてと訴える。
たつにいはそれを見ると、両手を広げて俺を迎える。
俺はそれを合図にたつにいに飛びつく。

「うっ、たつ、に…。こわっぃ！」
「大丈夫、大丈夫だ。」
「たつに…っ！」
「もう大丈夫。俺が居るだろ？」

そういってたつにいは、いつも母さんがしてくれてたみたいに、

俺の頭を2，3回撫でてから、俺の顔を覗き込んで、
『澪梓、大丈夫だから。泣くな。』って囁く。
俺はそれを聞くなり、安心してたつにいに凭れかかる。

たつにいは俺を抱き上げる。そして涙で濡れた頬と瞼にチュッと音を立ててキスをする。
そのまま、俺は泣き疲れて、たつにいの暖かい胸を抱きしめながら眠りに落ちた。

13－12

＋＋＋＋＋＋＋泰雅（鳴海）ｓｉｄｅ

食堂で有紀と転校生の愛川澪梓を見かけた。
愛川は、俺の前だと怯えてたくせに有紀には笑顔を振りまいてて、ちょっとムカついた。
だから声を掛けた。したら、やっぱ愛川は怯えやがった。

俺と有紀が喧嘩してたら、また愛川はまたまた怯えた。
有紀が焦りながら謝る。それを見た愛川が可笑しそうに口元を緩めながら
『だいじょぶ、です』って舌足らずな言葉でそう言った。

俺はそれを見て、我慢が出来なかった。

だから、愛川を引っ張って俺の部屋に連れて行こうとした。ら、また有紀が邪魔しやがった。
んで有紀と言い合いしてたら愛川が涙目になりながら、離せと叫んだ。
そういえば愛川の腕を掴みながら言い合いしてた。思い出して掴んでいた腕を離す。

また有紀が必死で謝ってる。
さっきはすぐに許してたけど、今回はそう簡単にはいかないみたい

だ。
何回も有紀が謝ってるのに愛川はそれを無視してる。段々と有紀の顔が曇る。
もう今にも零れだしそうなほどに瞳に涙を溜めて、愛川の名前を呼ぶ。
愛川も根負けしたのか、有紀を許す。

したら、有紀が愛川に抱き付いて、愛川は有紀の頭を撫でる。
ちょっとしたら、有紀が鋭い目つきで俺を睨みあげて、
さっき愛川を何処に連れて行く気だったのかと聞いてきた。

だから、正直に話した。話してたら段々有紀の顔つきが険しくなってて、それが面白くて
また口を開く。

処女か？だの、淫乱だの、色々言った。有紀の顔がまた険しくなる。
次は何を言ってやろう。そう考えてたら、愛川が震えてるのに気がついた。

有紀で遊ぶのが楽しくて、愛川の存在を忘れていた。
愛川に目をやると、有紀に劣らないくらいに険しい顔つきだった。
それに、普段でも真っ白な肌が、青白くなっていて、細っこい体がカタカタと震えていた。

少しからかいすぎたかと、今更ながらに後悔する。

ちょっと反省してたら、愛川の小さな唇が、震えながら開いた。
『…め…なさ…』この最初に発せられたその一言は、本当に小さくて、聞き取れなかった。
後ろに立っていた有紀も聞き取れなくて、『…澪梓？』て言ってたくらいだし。
でも、そこから愛川はハッキリした声で叫び始めた。

ごめんなさい、とか、許して、とか、いやだとか、色々叫んでた。
大きな緑の瞳からは輝きが消えていて、ただ涙を零すだけ。

『ひ、ろさんっ、やだ』
不意に愛川がそう叫んだ。有紀は、弘さんはここに居ない、と言っていた。
弘さん？誰だ。そいつが愛川をこんなに怖がらせているのか？
多分そうだ。けど、きっとそれを思い出させたのは、ーーー俺。

有紀は、愛川を落ち着かせようと抱きしめた。けど、今は逆効果みたいで、愛川は有紀を突き飛ばした。
すると愛川は驚いたように瞳を丸めて、また泣き出した。

俺は、唖然としてその姿を見ていた。俺には何も出来ない。否、俺がこうさせたんだ。
理玖が焦ったように有紀にどうにか出来ないのかと、珍しく声を荒げて問いかけていた。

理玖が焦るところなんて、数えるほどしか見たことない。
ただ、それほど今の状況が大変なこと何だろう。

有紀は理玖にそういわれるなり、どこかに電話を掛けた。
数分してから、有紀の兄の山中達紀(やまなかたつき)が来た。
有紀と話してから、澪梓に近づいた。澪梓はそいつの存在を確認するなり、そいつに
『助けて』と泣きながら訴えていた。山中は、両手を広げて愛川を待ち構えて、
そこに愛川は飛びつく。なんども怖いと呟く愛川に

山中は、大丈夫、と優しく囁く。
それでもなかなか泣き止まない愛川に、山中は
愛川の頭を2，3回撫でてから、
『澪梓、大丈夫だから。泣くな。』って囁いた。

愛川はそれを聞くなり、泣き止んで山中にもたれかかった。

山中は愛川を壊れ物を扱うように大事に抱え上げ、愛川の瞼と頬に軽くキスを落とす。
数秒したら、愛川から、『…スー』と寝息が聞こえた。

言っておくが、俺は愛川が好きだ。少し苛めてやろうとは思ったが、少なくとも此処までやろうとは思っていなかった。
多分、俺が言ったことは愛川には言ってはいけなかったことなんだ

ろう。

――――泣かせたいわけじゃない。

――――けれど、泣かせてしまった。

――――好きなのに……。

13騒動　終

14

＊14　安心

痛い。頭が痛い。喉が痛い。目が痛い。ココロが、痛い。
痛い、痛い痛い痛い痛い痛い。

真っ白な世界。誰も居ない、何もない。何も聞こえない。
そこに俺は1人。
怖い、怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い寂しい、寂しい、助けて…

俺は真っ白な世界の中で、痛いと怖いと寂しいと、助けてを声を荒げながらひたすら叫び続けた。

そしたら、声が聞こえた。何もない無の世界に声が響いた。大丈夫だ、と。
誰だかわからない。けど懐かしい、安心する声。
俺はその声を聞いて、涙を流して助けを求めた。

大丈夫だ、澪梓…

力強いハスキーボイスがそう言った。瞬間、白い世界は消えた。
そこにあるのは、白くも黒くもピンクでも水色でも、何色でもない。
透明な世界。それでも、怖くも寂しくも無いのは、
俺が、安心する優し何かに包まれている所為。

俺はその何かを抱きしめた。　怖かったのだと、寂しかったのだと。
助けてくれて、有難うと。
すると、その何かに抱きしめ返された。俺が居るからもう大丈夫だと。いつでも助けてやると。

その瞬間、その何かが誰かわかった。そしたら俺の表情はさっきよりも明るくなる。
有難う、有難う――たつにい。

安心した所為か、俺は浮上しかけていた意識をまた落とした。

１４安心　終

15

＊15　可愛い弟

＋＋＋達紀ｓｉｄｅ＋＋＋

澪梓を抱きかかえて、そこに居る奴らを見た。
悔しそうに唇を噛み締め拳を作ってる有紀。
焦りと困惑の色を含んだ目を俺に向けてくる副会長の三代。
何が起きたのか分かっていないのか、呆然と此方を見ているこの事件の犯人の鳴海。

俺はチッと舌打ちをしてから鳴海を睨んだ。
鳴海はそれで正気に戻ったのか、ハッとして俺を俺に焦点を合わせた。

「てめぇ、澪梓に何した。」
「……」
「説明することも出来ねえのか、屑が。」
「……」
「はぁ…話は後だ。とりあえず澪梓をどうにかしないと。有紀、お前の部屋連れてくぞ」
「…あ、うん」

俺と有紀が学食を出ようとすると、三代が遠慮がちに口を開いた。
「あの…。その、愛川くんは過去に何か…あったんですか？

例えば、襲われたことがある、とか…」
遠慮がちに開いた口に対して出てきた言葉は遠慮の欠片もない。
「はっ、てめぇに話してやる義理はねーよ」
俺はそう吐き捨てて有紀を引き連れ学食を後にした。

授業中だから人目につかなくて良かった。
そんなことを思いながら有紀の部屋に入り、俺の腕の中で規則正しく寝息をうつ
澪梓を、そっとベッドへ寝かせた。

そこで、有紀に話を聞いた。
電話で呼ばれたときは、ただ「澪梓が大変だから！早く学食に！」
という声とともに、
後ろで泣き叫ぶ澪梓の声が聞こえただけで、何が起きているのかまったく分からなかったのだ。

有紀に聞く話によると、会長が澪梓を部屋に連れ込み犯そうとしたとか。
それだけじゃ満足せず澪梓に向かって、淫乱やらなんやら言ったのだそうだ。

俺はそれを聞いて一気に怒りが沸騰した。なに言ってくれてんだ、あの野郎…。
今すぐ殺しに行こう。会長としてはまあまあ出来はよかったが、
澪梓に手を出したなら、そんなこと関係ない。今すぐ殺しに行こう。

そう思い椅子を立った時に、澪梓の眠る寝室から呻き声が聞こえた。
俺と有紀はすぐに寝室へ向かった。
すると、苦しそうに眉を寄せた澪梓が、痛い、怖い、寂しい、助けてと必死にそう言っていた。
俺は澪梓に顔を寄せて、安心させるように大丈夫だ、と声を掛ける。
すると、眉を寄せている顔が一変、助けを請うように涙を流しながら助けて、と必死に訴えかけてきた。
俺はそれを見て、大丈夫だ、澪梓…と囁きながら澪梓を抱きしめた。
そしたら澪梓が俺を抱きしめながら、『怖かった。寂しかった。助けてくれて、有難う…』
と一筋の涙を流しながら俺にそういった。
俺はそれを聞くなり、澪梓をさらに抱きしめた。
すると澪梓は優しく微笑み『有難う、有難う———たつにい。』
と呟き、また規則正しく寝息をうった。

有紀と俺は安心して、はぁと息を吐きだす。
鳴海を殺すのはまた今度。今はベッドで寝ている
可愛い大事な弟を見守ることが先決だ…。

１５可愛い弟　終

16―1

＊16　御袋の味

「ん…ぅ」

目を開けたら、見たことない天上。
横を見ると、見たことない机。
上半身を起して周りを見渡す。

俺が居る所は、見たことのない部屋にあるベットの上。
その部屋は、机とベットとタンスとクローゼットと窓だけっていうシンプルな部屋だった。
でも、なんか見に覚えがあるのは多分、寮の中の一室だから。
俺の寮の洋風の部屋も家具は違うけどこんな感じ。
てことは、ここは誰かの部屋？
ていうか、俺は何でこんな所にいるんだろう？

学食で会長に会って……たつにいが来た所までは覚えてる。
じゃあ、此処はたつにいの部屋？俺はそう思って、部屋を出るためにベッドから降りる。
そしたら、目眩がしてベッドに倒れこんだ。

「あ、」

違う。たつにいじゃなくて、有紀の部屋だ。布団が有紀の匂いがする。

「…落ち着く、なぁ……」

俺は布団を手繰り寄せて深く息を吸う。…あ！変態じゃないよ！！
安心したからか、目眩も治まって、俺は部屋から出た。
そしたら、誰も居なくてリビングの机の上に手紙が置いてあった。

ーーーーーーーーーーーーーーーー
澪梓へ

目が覚めたら、俺にメールしてくれ。
有紀と俺は授業があるから今は居ないが
メールが来たらすぐに向かう。

達紀
ーーーーーーーーーーーーーーーー

「はぁい」

俺は１人で返事して、たつにいにメールを送るために携帯を開く。

「…え？！」

そしたら、びっくり仰天。学食でたつにいにあった日から、３日も経っていた。
今は、４月１５日の９時４２分だった。
俺は３日間も眠ってたのか……。
それは、ショックが大きかったって事。俺はまだあの過去から開放されてないという事ーー。

「…っそれよりメール！」

俺はネガティブになりつつある気持ちを叩き起こしてたつにいにメールを作成する。
さっきより３分も経ってた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

２０××／　４／１５　９：４５

Ｔｏ：たつにい

ｓｕｂ：起きたよ

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

今起きた。

澪梓

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

１６―２

メールを送ってから2分後にメールが来た。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
２０××／　４／１５　９：４７
Ｔｏ：たつにぃ
ｓｕｂ：Ｒｅ：起きたよ
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

分かった。今から向かう

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

そう返事が来て、俺は大人しく椅子に座って待つ。
ていうか、たつにぃって今授業中なんじゃない？
寝ぼけてそんなことはちっとも思いつかなかった。
あああ、俺ちょう迷惑な奴じゃん。そう一度でも考えたら、どんどん落ち込んでいく。
３日前だって、絶対授業中なのに息切らせながら来させちゃったし、だいたい小さい頃から…。

なんて考えてたら、部屋の扉が開いた。

「あ…たつにぃ。」
「おはよ澪梓」
「おはよ」

「もう大丈夫か？」
「全然大丈夫だよ。有難う」

「どう致しまして。どうする？今日はもう学校休むか？」
「んーん、行く。」
「無理しなくていいんだぞ？」
「大丈夫。」
「そうか、じゃあ行くか。…とその前に」
「ん？」
「たつにい特性の焼飯でも作ってやろうか？お前3日間何も食べてないだろ。」

そう言われれば、お腹すいてるかも…。

「…お願いします」
「任せろ。」

たつにいは、ニカッと笑うと白いカッターシャツの袖を捲り上げて、キッチンに入っていく。
キッチンは対面式で、椅子に座ってる俺からもたつにいの姿が見える。

たつにいの料理は凄く美味しい。なんていうか、御袋の味？見たいな感じ。

.

16―3

たつにいは冷蔵庫から冷ご飯を取り出して、それを油をひいたフライパンにドサッと入れる。
てか、此処って有紀の部屋なのに勝手に材料使っていいのかな…？
…まあ、たつにいだし、いいか。

なんて、意味不明な答えで納得する。

そんなこと考えてる間も、たつにいはかっこよく料理してる。
ハムとか、ウインナーとか、卵とか、ネギとか、えびとか、貝とかいろいろな種類の具材を何の戸惑いもなく入れてく。
たつにいの料理は、御袋の味でとても美味しいんだけど、味付けとかはそのときの気分っていう
アバウトな料理なんだ。それでも毎回美味しいから吃驚。

そんなこと考えてると、いつの間にかもう完成したらしい。

「ほら、食え」
「いただきます」

俺は皿に乗った熱々の焼飯にスプーンを通す。

「…おいひ～。」
「ふはっ、そりゃ良かった」

たつにいは少し照れくさそうに笑った。
俺は小食なほうだけど、3日も食べてないからか、それともたつにいの料理が美味しいからか、
全部の焼飯を食べきった。

「ご馳走様でした～」
「お粗末さまでした」

たつにいは俺が全部食べたのを見て、嬉しそうに笑いながら俺の頭を撫でてくれた。
俺はその大きな手に擦り寄る。すると、たつにいはまた笑いながら2，3回撫でて、
食器を持ってキッチンに向かった。

「それじゃ、そろそろ行くか。」
「ん。」

俺はそういってたつにいと一緒に部屋を出る。

１６御袋の味　終

17

＊17　気がかり

たつにいの後ろをパタパタと追いかける。

身長も足の長さも全然違うから、たつにいと一緒に歩くときは常に早歩きだ。

たつにいなりにゆっくり歩いてくれてるけど、俺にはまだ全然速い。

歩きながら雑談しているとすぐに教室に着いた。

親衛隊の人とか、あの先生のこととか考えると、入るのを戸惑ってしまう。

でも中には有紀がいるし。と考えて扉を開けようとしたけど、たつにいに止められた。

「いま入ると授業中だから、目立つぞ」

「あ、そっかぁ…」

「授業が終るまで待っておこう」

「うん」

そういって、俺達はまた控え室に入った。

ソファーに座っているとまたココアをつくってくれた。

今度は火傷しないようにちゃんとフーフーする。

一口飲んで、飲める熱さになったのを確認してすこしずつのどに流

し込む。
一息ついたところで、気になっていたことを聞く。

「ねぇ、たつにい。」
「ん？なんだ？」
「たつにいは、授業じゃなかったの？」
「ああ、俺は次の授業からだ。」
「じゃあ、あの日、は…？」
「あの日も授業ではなかった。職員室で先生達と話していただけだ。」

それを聞いてほっとする。そしたら、気にするな。って頭を撫でられた。
ココアを飲み干した頃、タイミングよくチャイムが鳴った。俺の体が跳ねる。

「大丈夫だ。有紀もいる。行って来い」
「うん」

そして俺はまた自分の頬をペチンと叩く。気合が入ったところで、廊下へ出る。
まだあんまり生徒は居なくて安心する。教室の前と後ろにある扉の後ろのほうの扉に手をかける。

１７気がかり　終

１７（後書き）

やっと作成意欲が沸いてきたので最新です…
お待たせしました。５ヶ月ぶりの最新です（＊。д、）↑

18―1

＊18　心配

ガラガラという音と共に扉が開く。
ざわざわしていた教室内も扉が開いた音に反応して振り向く。すると皆驚いたように目を見張った。
その視線の中心には勿論、俺。
視線が痛くて縮こまる。俯いて服のすそを思い切り伸ばす。

「澪梓くーん！」
「ぅわっ」

俺が扉の前で棒立ちしてたら、前から誰かに飛びつかれた。
その衝撃で倒れそうになるけど、その誰かは俺より小さくて軽かったから、よろけただけですんだ。
飛びついてきた人物を確認するために、さっき吃驚して閉じてしまった目を開ける。

すると、目の前に、ミルクティー色のふわふわの髪が目に入った。
この髪、知ってる。莉兎さんだ。

「莉兎、さん…？」
「澪梓君！覚えててくれたの～！」
「ぅ、うん」
「うれしい～！澪梓君全然学校こないから、心配したよー！」

「ご…ごめん、ね」
「ううん！元気ならいいのー！」
莉兎さんは俺にくっついたまま、俺と目と目を合わせてニコニコしてる。それがすこし恥かしくて、
さっきから、目を逸らすと抱きつかれるから、また目を合わせて、
でも恥かしくて…の繰り返しだ。

そんなことをしてると後ろの上のほうから声を掛けられた。

「澪梓っ！！」
「あ、有紀」
「もう、なんで来るって言ってくれないんだよー！」
「ご、ごめん」
「教えてくれたら迎えに行ったのに！」
「あ、たつに…山中先生、に送ってもら、った」
「えー！兄貴だけずるいなぁ。」
「…あの、ね、有紀。ずっと、迷惑かけて、ごめん、なさい」
「ううん、迷惑なんて思ってない。」
「そーだよ澪梓君！有紀は迷惑なんて思ってないのー！」
有紀に同意するように莉兎さんが俺に声を掛ける。それでもすこし不安だ。
「澪梓君、有紀は迷惑ってよりすごい心配してたよ。な、莉兎」
「うん、そうだねー……って、拓也ー！」

.

18－1（後書き）

な、なんかキャラの口調とか難しい。
本当にキャラを忘れてしまいます。
ゼロのココロ一から読み直さないと……；

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1975t/

ゼロのココロ

2011年12月28日04時49分発行